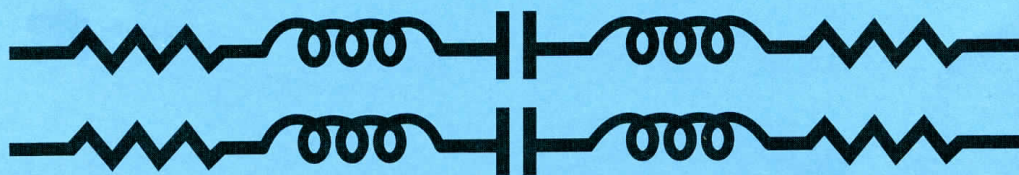


岩手大学電気電子情報科会誌

きたかみ

第 56 号

2010 年 3 月 発行

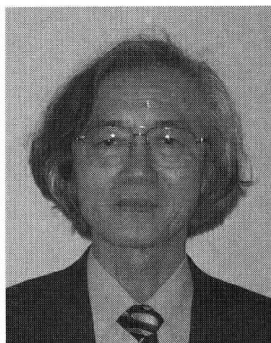


目 次

会長挨拶	会長 柏葉安兵衛	1
退職した先生からの寄稿		2
電気電子工学コースの近況	電気電子工学コース長 藤原民也	8
情報システム工学コースの近況	情報システム工学コース長 安倍正人	10
平成 21 年度総会特別講演	千葉則茂	11
仙台支部からの寄稿		14
細川元会長を偲んで		18
小澤元会長を偲んで		21
百足先生を偲んで		22
草刈賞		24
第 6 回（平成 20 年度）草刈賞受賞者		25
《支部だより》 平成 21 年度東京支部報告		27
平成 21 年度仙台支部報告		28
平成 21 年度盛岡支部報告		29
平成 21 年度電気電子情報科会総会		30
平成 21 年度電気電子情報科会総会議事録		31
平成 20 年度決算書		32
平成 21 年度予算書		32
平成 21 年度電気電子情報科会役員名簿		33
総会添付資料		34
平成 21 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿		35
平成 21 年 年表		36
岩手大学電気電子情報科会会則		39
トピックス・編集後記		40
平成 22 年度総会並びに懇親会開催のご案内		裏紙

ご 挨拶

会長 柏葉安兵衛（昭和38年電気卒）



不況が長引いておりますが、会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのことと存じます。会誌「きたかみ 56 号」をお届けできることを大変嬉しく思います。

本号で先ずご報告しなければならないのは、本会相談役元会長細川哲男さんが昨年の 6 月 19 日に、また同小澤甚一郎さんが 12 月 25 日にお亡くなりになったことです。小澤さんは昭和 18 年のご卒業で、昭和 30 年から 33 年まで会長をお務めになられ、戦後の混乱がまだ残っている時期に科会を発展させ、母校電気工学科の発展にもご協力なさいました。細川さんは昭和 24 年のご卒業で、平成 8 年から 10 年まで会長をお務めになら

れました。当時問題となっていた電気科会の名称や構成員の範囲について鋭意検討を重ね、その結果として次の太田原会長のときに名称を「電気電子情報科会」、会員に情報工学科の卒業生も含めることを正式に決めることができ、今日の大きな同窓会として発展するもとを作って下さいました。衷心からご冥福をお祈りいたします。科会から両会長のご霊前に弔辞を奉呈致しました。本号に弔辞と会員から寄せられた追悼文を掲載してあります。小澤さんの追悼文につきましては締め切りの関係上、次号に掲載したいと思っております。また、電気工学科で 27 年間にわたって教育研究にご尽力下さった百足恒彦先生のご逝去の報に接しました（平成 20 年 5 月ご逝去、享年 84 才）。心からご冥福をお祈りいたします。久保田先生から追悼文をご寄稿いただきました。

平成 21 年 3 月で田山典男先生（昭和 41 年卒）、久保田賢二先生（同 42 年卒）、道上修先生がご定年により退職されました。久保田先生は 42 年間、田山先生は 37 年間、そして道上先生は 15 年半にわたって電気系工学科で多くの卒業生を育てると共に、ご研究の面でも大きな成果をあげられました。また、田山先生、久保田先生には電気科会、一祐会でも大変活躍していただきました。これまでのご指導に心から御礼申し上げ、今後のご健勝をお祈りする次第です。科会では 1 月 23 日の盛岡支部主催新年会の席上花束を贈呈し、慰労と感謝の意を表しました。今号に先生方からご寄稿いただきましたのでご覧になってください。

一方、嬉しいニュースもありました。元電気科会会長で現在一祐会会長の太田原功先生（昭和 30 年卒）が昨年 6 月 1 日に発足した岩手大学同窓会連合の初代会長に、また、東京支部長澤藤隆一さん（同 47 年卒）が在京盛岡広域産業人会の初代会長にご就任されました。心からお祝い申し上げますと共に、ご活躍をお祈りいたします。

今春の卒業生の就職は不況にもかかわらず 100% 決まったようです。これも日ごろの先生方のご努力と、長年にわたって社会で活躍し母校の高い評価を定着させた会員の賜物であると思っております。今後とも会員の皆様には一層のご協力をお願いいたします。

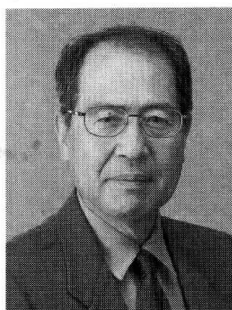
昨年の総会は、仙台支部のご協力をいただき、仙台で開催されました。この総会で、科会の財政健全化のために「会費検討委員会」を設置し、卒業 10 年毎にいただく「年会費」の集金改善を図ることとなりました。未納の方は本誌 30 頁の記事をご参考に、納入にご協力下さいますようお願い申し上げます。科会活動を活発にし、財政の健全化を計り、会誌の充実等を行いたいと考えています。なお、今年の総会は本誌にご案内のとおり、盛岡でチャグチャグ馬っこの日（6 月 12 日（土））に開催されますので是非ご出席ください。

会員の皆様のご健康とご活躍を心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

－退職した先生からの寄稿－

第二の職場 岩手大学での15年半の一石

道 上 修



平成5年10月に、NTT研究所から岩手大学の電気電子工学科に転職しました。着任以前に茨城大学、東北大学で非常勤講師・客員教授を経験していたため、教育のことは凡そ理解していました。

それでも、実際勤務しますと様々な出来事に出会いました。この小文では、企業出身者の視点から、幾つかの事柄を述べさせて戴きます。

大学職場への提言：以前の職場と大学の職場に大きな差を実感しました。NTTの4つの研究所には約3000名の所員（入社当時の総職員数34万人）が在籍し、所間、職種間で頻繁な人事異動がありました。一方、大学では、職員数は極めて少なく、教員の異動が無い状態です。これらの違いの他に、人事・評価に大きな違いがあります。NTTの人事は、企画室が一括して取り扱い、人物評価を重視した3段階で評価されているため、比較的納得できる人事が行われています。多くの大企業の開発研究者を相手に打合せし、実用化に繋げて行きますが、個人的には、この経験が、バランス感覚と開発技術のレベルアップに役立っています。組織への依存・寄生からくる弊害は人事異動の停滞にあるとして、異動が頻繁に行われています。学科は、少人数で、異動が無く、人事権が付与されています。このような小組織では、驚くべき環境が醸成されます。教員の異動には、学科の帰属と研究の継続の2つがネックと誤認されています。これらの課題に一石を投じたものとして学系制度が数年前導入されました。これは、教員が大学院に属し、一学科に拘わらず講義に出向く新しい試みです。この制度では、学科への過度な思い込みが無くなり、学科間の壁が払拭できるものと期待しましたが、現状では十分機能して

いない状況で残念に思っています。過度な学科帰属意識の撤廃と人物評価を重視した人事制度の導入は、今後の大学の生き残りには不可欠である様に感じています。

昨年工学部の学科が改組されました。この改組の命題は学科数の縮小にあり、これまでの7学科から5学科になりました。将来計画委員会に提出された最初の改組案は、電気電子工学科を2分割し、1つは材料物性工学科と、他は情報システム工学科と合併する案でした。この2分割での合併を阻止し、一体となって他学科と合併する案を推進しましたが、最終的には、電気電子工学科と情報システム工学科が合併し、電気電子・情報システム工学科に落ち着きました。新学科では、コース制を布いており、共通科目を全体で教育するものの、シナジー効果は殆どない感じであります。これは、抜本的な改組理念を構築する時間も無い状態での見切り発車で、労力の割には効果の薄い改組であった様に思います。それでも、構成員は2倍になったことから、小組織の弊害の一部は改善・防止できると期待しています。

近年、実践的な技術教育が益々重要になってきておりますが、この技術教育には、最先端の研究テーマの取り込みが不可欠と信じています。最先端技術研究を推進する教員とそれを基にした実践的教育を可能にする学科の構築を実現するためには、学科（コース）の基幹分野の設定、その研究を推進する教員の配置、更には、適正な人事のあり方が重要であり、コース制の枠を超えて、電気系全体で真剣に議論し、結論を導く必要があると思っています。

何はともあれ、これまで分離していた両学科が名実共に一体と成り得た今回の改組は、本電気電子情報科会にとって、大変好ましい歴史的改組と言って過言ではありません。

我が研究室配属学生：在職中、100名弱を研究室に受け入れました。講座配属では、当研究室は厳しいとの噂があったため、やる気のある学生と他研究室志望で余った学生の寄り合い所帯で、女子が殆どいない研究室でした。学生諸君には、社会に通用する人間形成と卒業研究、修士研究とも自分の問題であるとの意識付けを徹底しました。就活時には、学生と十分議論し、四季報を基に会社の概要を説明し、本人の適正を加味して会社を推薦しました。研究室では学部生から博士学生まで1室に同居させ、テーマ毎に先輩が後輩にテーマを分け与え、指導する体制をとりました。先輩は、装置の操作法、論文の紹介、英文論文の翻訳指導、研究の進め方、発表資料の添削等を行って、先輩としての自覚をさせ、能力を発揮させました。修士学生は年平均4-5名がおり、技術や研究の継承に不都合はありませんでした。生え抜きの博士学生は、15年間で4名でした。其々バランスの取れた、研究能力、指導力に優れた人物で、博士学生を頂点に統制の取れた研究室運営がなされました。この内の1人は、現在日立中研の研究員になりましたが、一流研究者に伍して立派な成果を挙げて貰いたいと期待しています。後輩は先輩の指示に従いつつ、研究手法と指導法を身につけ、研究室内では、良き先輩、可愛い後輩の雰囲気がありました。年賀状等に研究室で学んだ上下関係や、仕事に対する心構えが会社で非常に役立っていると記されてきますが、教師冥利に尽きると感じています。

教師としての醍醐味は、巣立った学生諸君が何時までたっても先生と生徒の関係にあり、教え子は、先生を敬っていることにありと確信しています。また、その教え子達が、立派に成長することは先生として掛け値無く大きな喜びとなっています。この様な関係は、下克上のある企業では今や皆無に近いものであります。15年半の在職中、着任後7年目、10年目（還暦祝）、15年目（退官記念）の節目に、卒業生が音頭を取って祝賀パーティーを開いてくれました。広島、九州の遠方にも拘わらず大勢に出席して戴きましたが、同伴の妻が小生以上に感謝

感激でした。還暦祝いにはチャンチャンコ、退官記念には研究室の歴史を綴った立派な写真集を贈呈して戴きました。我が家の宝となっています。

研究テーマの展開：交付金が削減されてきている現在、外部資金の獲得が必須となっています。資金獲得のためには、魅力ある研究テーマの発掘と迅速な展開が非常に重要です。NTT時代には、酸化物超伝導薄膜を用いたアクティブ素子の研究をしていましたが、大学では、移動体通信に搭載する超伝導フィルタ用の高電流密度薄膜の開発に研究をシフトしました。スパッタ成膜法を中心に展開し、世界でトップレベルの超伝導薄膜の製造法を確立しましたが、超伝導フィルタのシステム導入は時期尚早と判断しました。そこで、スパッタ法によるDLC（ダイヤモンドライクカーボン）の研究に着手しましたが、成膜速度と研究開始時期の点で、資金獲得が容易でないと判断し、この研究は中断しました。その後（5-6年前から）、ZnO透明導電膜の研究を開始しました。ZnOは、液晶ディスプレイのITO（錫を添加したIn酸化物）のInが、高価で、資源枯渇の問題があるため、代替材料の位置づけにあります。この研究は旬のもので、JST（科学技術振興機構）の育成研究事業、県の夢県土事業に採択され、1億円以上の研究費で研究を展開しました。夢県土事業が21年度までであることから、定年後も地域連携推進センターで研究を継続しています。蓄積した成果を製品として具現化するため、新組織の立ち上げを準備しております。漸く可能性のある研究テーマに遭遇したと思っております。これらの基礎データは、我が研究室の学生諸君の頑張りによって得られたものであり、大変感謝している次第です。学生と小生との共同作業を良い思い出として確実なものとするためには、事業化という果実を実らせなければならぬと肝に銘じています。

この小文の投稿の機会を賜り感謝致しますと共に、本会の今後のご発展をお祈り致します。

37 年間の楽しい思い出

田 山 典 男（昭和 41 年電気卒）



電気電子情報科会員の皆様には、ご健勝にお過ごしのこととお慶び申し上げます。

私は、昨年の 3 月末に定年退職いたしました。岩手大学電子工学科に着任したのは、昭和 47 年 4 月でし

たので、37 年間の長きにわたり勤務したことになります。私は、岩手大学電気工学科に 4 年間在学し、その後、東北大学の大学院に 2 年間在学し、企業に 4 年間勤務しました。従って岩手大学に 41 年間お世話になりました。

振り返ってみると、日本が高度成長を遂げた登り坂一直線の時代と、ベルリンの壁の崩壊で東西冷戦構造が終結した 1989 年（平成元年）に日本はバブル経済がピークを迎えて崩壊し、それ以降は脈動しながら低下するデフレ不況の下り坂の時代に、私は居合わせました。経済の登り坂に 17 年間と、下り坂に 20 年間です。下り坂では、B R I C s 台頭、グローバル化やインターネット革命が進行し、世界が大競争の激しい時代になりました。岩手大学も独立法人になり、運営仕組が大幅に変わりました。

人生を振り返ると、いろいろなことが思い出されます。山あり谷ありトンネルありますが、いつも「夢を追った人生」であり、仕事に熱中して走り続けて来た、楽しい 37 年間でした。これは皆様のお陰であり厚く御礼申し上げます。

私が電気工学科に入学したのは昭和 37 年で、当時は木造校舎でした。創設当初からの草刈、鎌田、入江の 3 先生がご健在でしたし、佐藤、志田、湧井の個性ある先生方から熱心な講義を授かりました。4 年生時の卒業研究では、志田純一先生のご指導を戴きました。磁心を用いた

ロイヤール発振回路の解析で、理論と実験の両面からの研究でした。当時、上田に在った N H K アンテナ塔からの送信電波の影響に悩まされ、放送終了の深夜になってから実験をしたことや仲間のことを懐かしく思い出します。

大学院進学を考えていましたが、当時、東北大学の菊地正先生の特別講義で聴いた多孔磁心による論理回路に惹かれて、東北大学の大学院電子工学専攻の菊地研究室に行きました。当時、トランジスタは点接触で安定に動作しなかったもので、安定な磁気論理と磁気記憶で構成するオールマグネティックコンピュータの夢を描いて、熱中しました。磁気論理回路系の研究で、毎週数回朝方までアイディアを模索していたことが懐かしく思われます。ワクワクしていました。

その後、鉄道信号や交通信号を扱う日本信号という会社に入りました。そこでコンピュータソフト開発と、当時始まったばかりの新幹線の大規模オンラインリアルタイムシステムの開発に従事しました。システムプランナーへの道を实地修練してシステムの構想力と構築力を磨きました。その後、岩手大学電子工学科に赴任しました。当時は、工学部構内に木造校舎がまだ残っていたのを思い出します。博士取得が急務でしたので、大学院で研究していた多値論理系に熱中し、新たな「対称 3 値論理系の研究」を創案提出して、東北大学から論文博士の学位を取得したことを思い出します。会社とは違ってお金が殆ど無しで、紙と鉛筆と小実験だけで、どのようにして学会論文誌へ自分の独創論文を掲載するかが試練であり悩みでした。

瞬く間に、情報工学科が昭和 50 年創設されて、新設学科に移動しました。情報工学科では、論理回路や計算機構造論のハード関係の講義と学生実験や演習装置作りを担当しまし

た。思い出深いことは、「3次元並列画像処理計算機PIPE」の開発です。情報一回生8名の卒業研究で、世の中に存在しなかった「画像を並列処理するコンピュータ」の試作に挑戦しました。皆が熱中し燃え上がり、3次元並列画像処理という基本概念を構築しました。そして最新のビットスライスプロセッサLSIを32個組み込み、128ビット幅マイクロプログラムで制御する独創的な並列コンピュータの基本設計を成しました。大学院に進んだ3名が結束分担し二回生が加わり膨大な実装設計に取り組み、毎日ニンニクを食いながら、手巻きのラッピング作業で、総数50枚超の配線基板を手作りしました。そして、コンピュータPIPEを、遂に動かしました。その時の皆の感動は、生涯、忘れられません。マイクロプログラムや画像処理専用命令体系を作り、専用コンパイラやOSの基本ソフトも手作りして、動画像へ拡張しました。

平成7年度から博士課程設置に伴い改組した電気電子工学科に移りました。その頃、他省庁から提案公募型の研究プロジェクト募集があり、岩手県から勧められて、通産省の中小企業創造基盤技術研究開発に提案応募し採択されました。平成8年から3年間、岩手県工業技術センターと県内企業3社で、産学官大型研究プロジェクト「FMR原理による産業用3次元CT装置の開発研究」を実施しました。これまで岩手大学が提案した、極少数方向投影データから誤差最小な画像を実時間で再構成するFMR原理により、画像再構成VLSI（超大規模集積回路）、並列画像処理計算ボード、CT超並列処理計算機、X線投影スキャナーを技術開発しました。当時30万ゲートを超えるVLSIの実現は脚光を浴び、採択された全国30プロジェクトの中でトップ10に入り評価されました。

次に、この独創的なFMR原理を他の分野へ応用展開する研究として、①FMR原理とホログラフィ原理を融合して、3次元物体の内部を立体視する新技術の提案、②FMR原理と磁気

共鳴現象NMRを組合せて、複数の核種分布を画像化する産業用多重MRIの提案、③海洋の音波伝搬時間データからFMR原理により、広領域の海洋中3次元温度分布を画像化する海洋トモグラフィ技術の提案など、「革新技術」への創造可能性を探求しました。国際会議で研究の成果を発表し、これらのFMR原理に関連する研究で、4名の大学院博士を輩出しました。

こうして研究教育人生を振り返ってみると、学生の皆さんに耳寄りな事実に気付きました。それは、「若い時に懸命に修得した体験が、期せずして後の方で、いろいろ役に立っていた」ということです。若い時に、懸命にやったコトは、自分の身に着いてるので、必要になった場面で自在に活用し役立てられるのだろう、と思います。何事も、懸命にやるのが、要のようです。

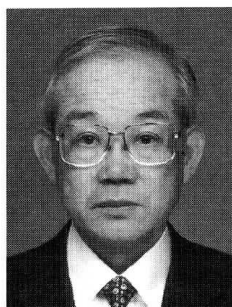
毎年4月に新4年生を迎えて学生さんと共に歩んで来た37年も、終わりました。学生さんと共に研究ができたことは、大きな喜びでした。皆さんの顔が、次々浮かんで来ます。卒業の頃、皆さんの成長した姿に優秀だ、と感じました。私の人生を振り返ってみると、登り坂よりも、下り坂のこの20年が世の中の流れが速くなり大きく変わったと感じます。盛岡の街並みも、すっかり変わりました。大学も変わりました。願わくば、この先、下り坂の時代から抜け出し、経済持続発展可能な、希望や見通しが持てる、成熟安定の社会へ移行することが望まれます。日本の経済成長戦略や仕組の改革が進められているようですので、期待したいと思います。

37年間、熱中して楽しく仕事ができ無事に退職できたのは、ひとえに恩師の先生方、ご支援いただいた教職員の皆様、研究室で共に学んだ卒業生の皆様、そして電気電子・情報科会会員の皆様からのお世話によるものでございまして、心から御礼を申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈りし、母校電気電子・情報システム工学科と当科会のご発展をお祈り致します。

在職中の思い出

久保田 賢 二（昭和 42 年電気卒）



会員の皆様には愈々ご清
祥にてお過ごしのこととお
慶び申し上げます。岩手大
学電気電子工学科を定年退
職したということで貴重な
紙面の提供を受けました。

昭和 42 年 3 月に岩手大
学工学部電気工学科を卒業、同年 4 月教務員と
して採用され、以来 42 年間奉職させていただきました。当時学科長であられた故草刈遜先生
から、正確な言葉は思い出せないのですが、「君
には悪いけれど、発令が 4 月 1 日より遅れるか
も知れない。いろいろ支障があるので、こっち
も困るけれど…」という趣旨のお話を戴いたの
を記憶しています。当時の予算審議の状況次第
ということだったのかも知れません。

ともかく 4 月 1 日付けで採用されて、電気工
学科電気通信工学講座に配属されました。ご年
配の方々には懐かしい響きかと思いますが、私
の入学時はまだコース制で、電気工学科は (A)
電力発生分配コース、(B) 電力応用コース、(C)
電気通信工学コースの 3 コースに分かれており
ました。卒業の頃は電子工学科の設立に伴って
講座制へと移行している時期であり、電気工学
科は電気基礎学、電力発生分配工学、電力応用
工学、電気通信工学の 4 講座、電子工学科は電
子応用工学、電子材料並びに計測学、電子管及
び電子回路学の 3 講座が充実されつつあった時
期と記憶しております。

採用された時には本学工学部の前身盛岡高等
工業学校創立時からの草刈遜先生、鎌田徳美先

生、入江泰先生の 3 先生にはご壮健で、草刈先
生は電気基礎学講座教授で工学部長、入江先生
は電子工学科へ移られて学科運営に心血を注い
でおられ、鎌田先生は定年ご退官されたばかり
で非常勤で講義に來られて 1 階事務室隣の部屋
に居られました。電気通信工学講座は三輪忍教
授、太田原功助教授、沼田徳重技術員がおられ、
そこに菊池幸吉技術員と私が配属された次第で
した。

最初の仕事は学生実験指導補助で、学生実験
の 1 テーマである「陽極変調回路」の担当を仰
せつかりました。前年まで使用していたという
実験装置やメータをテーブル上に配置して貰
い、教わりながら配線、予備実験に取り掛かっ
たのですがうまくいきませんでした。装置は電
源と変調回路とに分かれており、どちらも真空
管を用いて大分前に手作りした装置であり、電
源は何台かの中から正常動作するものを探すこ
とができましたが、1 台きりの変調器の方は不
安定で調子が悪く、不勉強で不慣れながらハン
ダの付け直しや調整を行い、実験開始日の朝に
やっと不安定さは除去できたものの実験項目で
ある 100% 変調及び過変調波形を観測すること
ができず、僕担当の実験のみその週は中止、後
日実施と計らって貰いました。太田原先生と当
日運悪く変調回路の実験日に当たっていた学生諸
君には実に迷惑を掛けてしまいました。その後
菊池氏の全面的な援助指導を受けて変調器を新
たに製作し、ずっと学生実験に使用していまし
た。このとき B 電源にドライバを接触して先
端溶損する経験も初めてしました。

研究面では、最初の半年間は太田原先生の指導下で卒業研究の継続、その後は三輪先生の下でと言われましたが、三輪先生の擾乱電磁界の研究に主力を移し得たのは結局1年半後になっていました。昭和44年1月に三輪先生は宇都宮大学に転出されましたが、昭和49年まで三輪先生ご指導の下にFMレーダやドプラVORの電波擾乱誤差の研究を続けさせて頂きました。三輪忍先生には平成20年6月2日92歳で逝去されました。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

昭和49年5月～10月東北大学教授佐藤利三郎先生の研究室で私費内地研究員としてご指導戴く機会を与えられ、アンテナの勉強を始めました。以降退職までアンテナの勉強を続けることになりました。最初の頃は難解で自分には継続が無理かとも思った時もありましたが、当時の佐藤研究室の諸先生方並びに大学院生の皆さんのお陰で何とか継続することができました。

昭和61年秋、当時東北学院大学工学部長であられた佐藤利三郎先生に大型鉄塔設置のためのテレビジョン放送アンテナの研究開発のお手伝いの機会を与えられました。この研究は古河電工と東北学院大学との共同研究で同大学多賀城キャンパスに直径6メートルの大型アンテナ放射指向性測定用回転台が設置され、同大学教職員の方々や大学院生と一緒に多面合成アンテナの研究を始めました。私は非常勤講師として東北学院大学大学院ゼミナール指導のお手伝いを仰せつかり、充実した教育研究活動を行うことができました。

その間、岩手大学卒業研究として柏崎靖之氏が独自に開発完成させたアンテナ指向性自動測定システム（昭和58電気関係学会東北支部1H5）を本学栗田宏明技官にバージョンアップ、東北学院大学の測定システム向けにハード・ソ

フト全てを製作・調整して戴いて取り入れ、測定効率と精度を大幅に向上させることができました。大型アンテナ指向性自動測定システムが完成したのは栗田氏の技術と献身的な努力の賜物でした。研究成果は1995年東京MX-TV放送アンテナとして東京タワーに設置現用されています。また、地上テレビジョン放送デジタル化に向けてのTV放送アンテナの研究に着手し、2003年に東京タワーに設置されて関東圏の地上デジタルテレビジョン放送アンテナとして現在使用されているスペース共用多面合成アンテナの研究にもこの装置を使用しました。

多面合成アンテナの数値計算には、最初の数年間当時情報工学科に設置されていたOKITAC 50/40を、学生の実験実習が終わった夕方から朝まで、休日もフルに利用させて頂きました。部分的な小さな計算プログラムは電気工学科に設置されていたミニコンピュータOKITAC 10も使用してデバッグしました。このミニコンの入力媒体は8単位穿孔紙テープでした。

奉職した頃は岩手大学初の汎用コンピュータFACOM 231が導入されて1年後、学内で利用・プログラミング講習会が開催されて、本格的に稼働され始めた頃でした。プログラムを6単位紙テープに穿孔し、読み込ませた後コンパイルまでの時間を利用して岩山ヘスキーに出かけた日もありました。穿孔紙カード時代を経て、コンピュータは当時を想う縁がないほど進化しました。真に隔世の感です。

貴重な紙面をつたない文で綴らせて戴きました。最後になりましたが、皆様のご厚情のお陰で定年退職できたことに感謝申し上げ、母校並びに本会の発展、そして皆様のご健勝とご活躍を衷心より祈念致し、筆を擱きます。

電気電子工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 電気電子工学コース長 藤 原 民 也

電気電子情報科会の皆様が、ご健勝で社会のさまざまな分野で活躍されていることは私たち母校に職を報じている者にとって大きな誇りであり、大変心強く思っております。

岩手大学は、昨年 2009 年に創立 60 周年を迎えました。その記念行事の一つとして、ホームカミングデイを行いました。これは卒業生の皆様に母校・岩手大学に帰ってきてもらい、大学生活を再び懐かしみ、楽しんでもらおうという卒業生のための特別の一日でした。その日は、2008 年ノーベル物理学賞受賞者の益川敏英氏の記念講演の他、「懐かしの学食」、「学部懇談会」、「まるごとミュージアム」など様々のイベントが企画されました。

さて電気電子工学科は、学部改組により昨年 4 月 1 日より電気電子・情報システム工学科となりました。これは電気電子工学科と情報システム工学科、および福祉システム工学科の一部が再編成されてできたもので、入学定員 120 名の工学部で一番大きな学科です。この再編は、近年急速に進む高度な電子情報化への対応や産業界からの幅広いニーズに応えるために行われました。電気・電子・通信・情報の広範な分野に対して、「電気電子工学コース」と「情報システム工学コース」の二つの教育プログラムを設けて、これらの分野に関する基礎・基本を重視した体系的な教育を目指しております。特に、多数の実践的な科目の履修を通して「もの造り」の意義とその基本技術を身につけさせ、専門基礎学力と柔軟な課題解決能力をもった人材の養成に力を入れる方針です。1 年生は入学後 9 月まで同一カリキュラムで教育を受け、10 月からは「電気電子工学コース」と「情報システム工学コース」に分かれて、現在それぞれの教育プログラムに従って専門知識を習得していると

ころです。学科運営では、改組前に入学した学生が在籍するため諸会議の回数が非常に多い状態です。学科に関わるものだけでも、新学科の会議、新学科コースの会議、旧学科の会議の 3 種類があるため、私もときどき、どの会議であるのかを混乱することもあります。新学科の教員数は現員で 38 名です。この数から大きな会議室も教員でいっぱいとなります。構成員が多いと会議はまとまりにくいものですが、当学科の会議では議事進行がいつもスムーズです。これはコース間の協力体制が大変良好であることの表れですが、元をたどれば平成 4 年度頃までは当時の電気系 3 学科は「一体運営」をしておりました。その結果、種々の活動において 2 コースの取り組み方が非常に近いと言えます。教員数が多いことは学科のアクティビティ向上につながり、様々な点でメリットがあります。このメリットを活かしながら、今後の学科運営や教育研究活動に取り組んで参りたいと考えます。

新学科の電気電子工学コースについて、教員の構成と教育研究の内容をお知らせ致します。旧電気電子工学科の教員陣に、旧福祉システム工学科から谷口宏先生、小林宏一郎先生、田野崎真司先生が加わりました。これによって電気電子工学コースの教育組織は一段と充実しました。電気エネルギー工学分野では電磁気学・電力工学・電気物理・強電界工学などを基礎としてプラズマ工学・パルスパワー応用・凝集系低エネルギー核反応に関する教育研究、電子デバイス工学ではエレクトロニクスの基盤をなす半導体・磁気・光学などを応用した磁気デバイス・電子デバイス・光デバイス・生体磁気計測ならびに超 LSI を製造するための半導体集積回路等に関する教育研究、電子システム工学分野では電子回路・通信工学・計測制御・信号処理など

を基礎として光学応用システム・磁気センサシステムや計測制御システムの開発に関する教育研究をそれぞれ行います。

今年度も特別講義「社長実践学」を開講しました。特別講義は電気電子工学科の3年生と4年生が対象の科目で、二つに分けることができます。一つは学会主催の学術講演を特別講義として学生に聴講させるものです。もう一つは、私たちが通称「社長実践学」と呼ぶもので、本会員による特別講義です。この講義では、学生が大学で学ぶべきこと、社会人にとって大切なこと、会社のしくみなどを卒業生という立場や先輩という立場で学生に分かりやすくお話して頂いております。今年度は、池田隆夫様（昭和35年3月卒）、梅良之様（昭和42年3月卒）、澤藤隆一様（昭和47年3月卒）、齋藤新一様（昭和49年3月卒）の4名の皆様に講義をして頂きました。

すでにご存じのことと思いますが、岩手大学には「学系」という教員所属組織があります。これは、教員所属組織が一元化されることにより、教員の交流が学部間の壁を越えてそれまで以上に活発化し、組織が全学として最適化されることを期待したもので、平成19年度に出来ました。物質機能・エネルギー科学系、システム理工学系、環境科学系、数理基礎科学系、応用生命科学系など全学には文系も含めて11の学系があります。当学科の教員のほとんどはシステム理工学系に所属しております。学系が出来て3年目にあたる今年度は、当電気電子コースが主体となって学系シンポジウムを企画しております。これは学外から講師を呼んで講演を行い、ディスカッションなどを通して、学系内の研究交流の促進や研究グループの形成がねらいです。講演は、「ブレイクスルーのイノベーション理論」、「無線LANの要素技術と標準化動向、人支援ロボットの開発」、「岩手・宮城内陸地震にみられる地磁気信号の変動」、「循環型社会形

成のための環境、資源、エネルギー」、「通信の雷防護技術と国際標準化動向」などで広い分野の多岐にわたっております。

この一年間の人事異動をお知らせします。昨年3月に田山典男先生、道上修先生、久保田賢二先生が定年退職されました。先生方が去られたことは当学科にとって大きな痛手ですが、残された私たちが奮起して一層の努力をしなければならぬと考えます。三人の先生方には長年にわたり教育研究と学科運営にご尽力されたことに心から感謝を申し上げます。4月にはNNT 未来ねっと研究所から本間尚樹先生が着任されました。本間先生は、東北大学大学院博士後期課程修了後日本電信電話株式会社に入社して、高速固定無線通信用アレーアンテナやブロードバンド衛星通信システムに関する研究をされました。この研究実績を生かして、大学ではメディア通信システムや電子通信システム工学特論などの講義を担当しております。また、向川政治先生が准教授に昇任されました。これまでの放電プラズマ応用に関する研究に加えて、今後はフォトリソグラフィなど電子デバイス工学分野での活躍が期待されます。

学生の就職事情については、今年度も厳しい状況に変わりはありませんが、本学の電気電子工学科・電気電子工学専攻への求人数は少し減少したものの社会一般からみれば依然として高いと言うことができ、就職希望者はほぼ全員内定に近い状態です。これも卒業生の皆様がこれまで様々の分野で活躍して、岩手大学の当学科が社会から大きな信用と高い評価を得ていることの表れであると思って、感謝しております。私どもはこの財産を食いつぶすことのないよう人材育成には一層の力を注がなければと心を引き締めております。

末筆となりましたが、会員の皆様のますますのご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

情報システム工学コースの近況

電気電子・情報システム工学科 情報システム工学コース長 安倍 正 人

電気電子情報科会会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて、今年度に関わった電気電子情報科会に
関わる大きな変化として、工学部・工学研究科
が改組されたことが挙げられます。この改組に
伴い、学部としては、電気電子工学科と情報シ
ステム工学科が統合されて新たに電気電子・情
報システム工学科が誕生し、また、大学院とし
ては、デザイン・メディア工学専攻が誕生しま
した。両学科の統合は、産業界から近年強く
要望されてきている組み込みシステムの発展
には、ハードウェアとしての電子機器と、それ
を動かすソフトウェアの両方を同時に教育・研
究することが不可欠であるとの考えからなされ
ました。また、デザイン・メディア工学専攻は、
日本が得意としながら、人材の育成が不十分で
あった、アニメやCG(コンピュータ・グラフィッ
クス)に代表される<環境、プロダクト、コン
テンツ>のデザインからなるデザイン工学とメ
ディア工学からなる融合分野の教育・研究を強
力に推進するために新設されました。

当コースの今年度の国際交流としては、吉森
准教授を担当としてのキルギス共和国との学術
交流が挙げられます。はじめにキルギス トル
コ マナス大学と岩手大学が共同主催する学術
セミナーが以下のように2回開催されました。

・"International Joint Seminar on information
Science and Technology 2009 (IST2009)" 岩手
大学, 平成 21 年 5 月 21 日

・"International Joint Seminar on information
Science and Technology 2009-2 (IST2009-2)"
Kyrgyz-Turkey "Manas" University, Bishkek,
Kyrgyz Republic, 平成 21 年 9 月 11 日

そして、これを契機として、キルギス トルコ
マナス大学, 工学部, コンピューター工学科と
の学部間交流協定が平成 21 年 11 月 22 日に締
結されました。

続いて、キルギス スラブ大学と岩手大学が

共同主催する学術セミナーも以下のように開催
されました。

・"International Joint Seminar on Optical and
Information Technology 2009 (ISOT2009)"
Kyrgyz-Russian (Slavic) University, Bishkek,
Kyrgyz Republic, 平成 21 年 9 月 15 日

また、このセミナーを契機としてキルギス科学
アカデミーと吉森准教授の間で「次世代ホログ
ラフィー技術に基づく情報記録・3次元イメー
ジング」に関する共同研究が開始されました。

また、千葉教授らと大連理工大学の電子情報
学院およびソフトウェア学院との教員同士の研
究交流が9月15日～18日に行われ、さらに、
JASSO(日本学生支援機構)の帰国外国人留學
生交流関連事業として、9月5日～14日に今
野教授が西北農林科技大学の情報工程学院と研
究交流を行いました。

研究面では、今年も学生を中心とした研究発
表等に対して以下のような多くの授賞がありま
した。学会名、受賞名、受賞者、研究論文題目
名を以下に示します。

①日本光学会(応用物理学会)、光みらい奨励
金 公募採択テーマ、笹本益民(情報工学専攻
2年)、指導教員: 吉森久、「全干渉計測による
3次元分光立体像の初期画像取得」

2月27日, 50千円

②日本機械学会、日本機械学会船井賞、原美オ
サマ助教、「対向型多指ハプティックインター
フェイスロボット HIRO の研究開発」3月26日

③芸術科学会、平成20年芸術科学会論文賞、
菅野研一(電子情報工学専攻D3)、千葉則茂(電
気50年)、「マイクロホンベースの風速センサ
の開発と実世界の風に揺らぐ樹木のリアルタイ
ムアニメーションへの応用」3月19日

不況の影響で、来年度の就職状況は非常に苦
しいと感じていますが、教職員一同努力してい
く所存ですので、会員の皆様には益々のご支援
を賜りますようお願い申し上げます。

－平成 21 年度総会特別講演－

「電気系学科再編の背景とそのねらい」 要旨

電気電子・情報システム工学科 千葉 則 茂（昭和 50 年電気卒）

特に、法人化して以来、同窓の皆様からも母校に対する評価の目が向けられていることと思います。また、講演のテーマであります改組のねらいをご説明する上でも、まずは大学の規模について少し触れておきたいと思います。

本学は、学生数が約 6,000 名、教員数が約 520 名、職員数が約 280 名で、予算規模が約 120 億円の大学です。少し余談ですが、これに対して、今回の総会開催地であります仙台在住の方が良くニュースをお聞きになるのが東北大学だと思います。この東北大学は、本学と比べ、学生数比で約 2.5 倍、教員数比で約 6.5 倍、職員数比で約 10 倍、予算比で約 10 倍です。本学には基本的に教育担当を義務としない教員はほとんどおりません。報道では、大学の業績は、科学研究費の獲得額など、絶対値で示されることが多く、皆様方もそれを目にしておられることと思いますが、少しは、この規模の違いを考慮していただいてご覧頂くことを期待したいと思います。

工学部の学生の出身地構成は、もちろん年にも寄りますが、岩手県出身者が約 45%、宮城と青森で約 30%、北海道と秋田で 10%、それ以外がその他の東北地区と北関東で占められています。就職先は、情報系では約 25%が県内、約 30%が仙台地区、残りが首都圏となっています。このように、全国平均以上の岩手県の少子高齢化に加え、若者の県外流出が止まりません。このままでは次世代の入学生の減少が必至であり、大学の存続も地域経済も危ういと思われます。そのため、大学にも地域振興の一端を担うことが期待されているわけです。もちろん、産業振興のみならず、スポーツや文化を含む生涯教育による地域活性化も期待されています。

これらの背景もあり、本学の地域連携は活発であり全国的にも有名になっていることかと思われます。また、地域の産業振興に向けて、他地域や中国大連地区との連携にも力を入れているところです。

岩手県の有効進学者数は、約 5,000 名程度のものでして、本学の学部入学定員は約 1,200 名ですから、全員が本学を受験してくれたとしても 4 倍程度です。近隣県から学生を集めても、お互いに入出りがあることを考えると、東北、ましてや岩手県だけから学生を集めることでは、低い倍率に甘んじなければならないことは明らかなです。これに加えて、工学、特に電気電子情報系離れが全国的に未だ深刻な状態にあります。志願者倍率が 2.0 を下ることも有り、学力の低下が懸念されます（ある学力のまとまった層（同一教育が有効な層）を入学生とするためには、2.0 倍が目安になるようです）。これでは、国際競争下に置かれている産業界のオフショアを進め、地域企業の競争力低下を招きかねません。

一方、産業界からの大学院修了生への期待は大きく、それに伴い大学院への進学率も上昇しており、工学部で約 40%となっています。電気電子工学科では 50%にもなっています。最近の電気電子情報系卒業・修了生では、携帯電話、自動車、家電、製造機器、ロボットなどのインテリジェントなシステムの開発に携わる者が増えてきています。また、工業先進地では人材不足が深刻で、本県のような人材供給県が目立ってきています。それも人材を先進地へ集中させようというのではなく、事業所を設置し地元採用を推進しようという傾向が現れてきております。宮城県や岩手県の自動車関連企業の

拡大や新たな進出に伴い、岩手県においても、自動車関連ものづくりや組み込みソフトの振興に力を入れております。盛岡広域地域、北上川流域地域、岩手県県北地域には、企業立地促進法に向けた産業活性化協議会が設置され、盛岡地域では、組み込みソフトやIT・システムを中心とした産業集積の基本計画が了承されており、関連する人材養成が期待されています。

以上の背景、すなわち“学部志願者の減少、大学院進学者の増加、時代の変化に対応した人材養成への期待”に答えるために今年度に改組を行うことになりました。この改組計画では、従来の7学科を、応用化学・生命工学科、マテリアル工学科、電気電子・情報システム工学科、機械システム工学科、社会環境工学科の5学科に統合・再編しました（入学定員は430名から400名に削減です）。また、工学研究科については従来の博士前期課程9専攻を応用化学・生命工学専攻、フロンティア材料機能工学専攻、電気電子・情報システム工学専攻、機械システム工学専攻、社会環境工学専攻、デザイン・メディア工学専攻、金型・鋳造工学専攻の7専攻に（入学定員は36名の増加です）、博士後期課程は現在の3専攻からフロンティア物質機能工学専攻、電気電子・情報システム工学専攻、機械・社会環境システム工学専攻、デザイン・メディア工学専攻の4専攻に（入学定員は4名の減です）、再編・新設になりました。これまでの電気電子工学科と情報システム工学科は「電気電子・情報システム工学科」を構成し、電気電子工学コースと情報システム工学コースを設けて教育にあたっております。（工学部・工学研究科のHP：<http://www.eng.iwate-u.ac.jp/jp/index.html>）

また、情報システム学コースの主にメディアシステム学分野の教員はデザイン・メディア工学専攻のスタッフとなりました。この専攻は、環境系教員と教育学研究科の芸術系教員からのスタッフとともに、＜環境、プロダクト、コンテツ＞に関わるデザイン工学とメディア工学

からなる融合分野の教育を担当します。（この専攻では、従来の「工学」の他に「芸術工学」の学位の授与が可能となりました。工学研究科の中にある専攻としては、全国で初めてのことです。）そのため、電気電子・情報システム工学科の卒業生は、「電気電子・情報システム工学専攻」か「デザイン・メディア工学専攻」に進学することが可能となりました。

本学でもそうですが、日本では電気系学科を母体として設置されたところが多い情報系学科ですが、これまで情報システム工学は電気電子工学とは異なる独自の発展を遂げてきており、電気回路や電磁気学などの物理を基礎としない学問領域が拡大の一途をたどっております。そのため、共通とする学問領域は昔ほど大きいとは言えませんが、一方では日本が強みとする組み込みシステムの発展と特に組み込みソフトウェアの巨大化により、電子制御工学やソフトウェア工学などの両者の近接領域の協働が強く求められております。今回の改組による学科の統合の意義もここにあります。

以上の改組のみで、工学系学科の冬の時代を乗り越えるのはもちろん難しいと思われます。そのため、志願者の出身地を拡大する努力として、入学試験会場として、東京、札幌、名古屋に拡大してきています。また、オープンキャンパスなどの機会には、岩手県に加え、北海道や愛知の高校の先生方にも工学部を見ていただくような努力も行っています。

特に、博士後期課程では、日本人学生の進学率は低く、一方では、国際競争下にある産業では優れた人材が期待されることから、またオフショアの進展に伴い、ブリッジエンジニアの育成も期待されており、優秀な留学生を確保する努力も行っております。現在、当学科が担当する学术交流協定大学には、チュラロンコン大学（タイ）、西北農林科技大学、新疆大学（中国）、モンゴル国立大学、モンゴル科学技術大学（モンゴル）、キルギス・マナス大学（キルギス）などがあります。また、本学は

大連理工大学（いわゆる国家重点大学で、3万人ほどの学生を擁しています）と大学間協定を結んでおり、UURR（University University & Region Region）と呼ぶ、大学を介在させた日中の地域間連携が進められております（写真1）。大連地区は、上海、北京とともに産業の発展の著しいところで、昼間人口約60万人の大連経済技術開発区があり、また広大な面積を持つソフトウェアパークの新設が相次いでおり、日本企業の多くが進出しています（写真2）。工業界に向けた人材養成を目的とする当学科も、近隣アジア諸国との関係の中で人材養成を考える必要があると思います。この夏には、学科の教員を中心として、大連理工大学の電子情報学院とソフトウェア学院との連携関係を深めるべく、まずは教員同士の研究交流に出かける予定です。（すでに出かけております。ソフトウェア学院は、入学定員が800名であり、工学部の約2倍の規模です！）今後は、工学部・工学研究科として学生交流協定が結ばれる予定です。

改革の残る課題として、以下のようなことが

挙げられます。工学部・工学研究科全体としては、特にロボットなどのシステム系の教育組織の強化、電気電子情報系では組み込みシステムなどのコンピュータエンジニアリング分野の強化が挙げられます。また、少子化の対策として、特に情報系では、女子の志願者としての開拓が挙げられます。さらに、大学だけでは解決が出来ないことですが、「日本は科学技術立国と言いながら、日本の科学者・技術者は幸せでしょうか？」工業界全体の課題として、重要な問題と思われます。

また、大学は心の豊かさの実現への期待もかけられており、本学の地域連携の大きな任務として、生涯学習事業にも取り組んでおります。いずれにせよ、大学は人材養成で地域貢献・社会貢献を行うことが本分であり、それが最も期待されていることだと思われます。

以上、大学再編の背景とねらいについて、私見を大幅に加えながら述べさせていただきました。電気電子情報科会の皆様にはますますのご支援をお願い申し上げます。



写真 1. 大連での産業交流・企業調査（2007 年）
（左：全体会議、右：IT 系分科会）

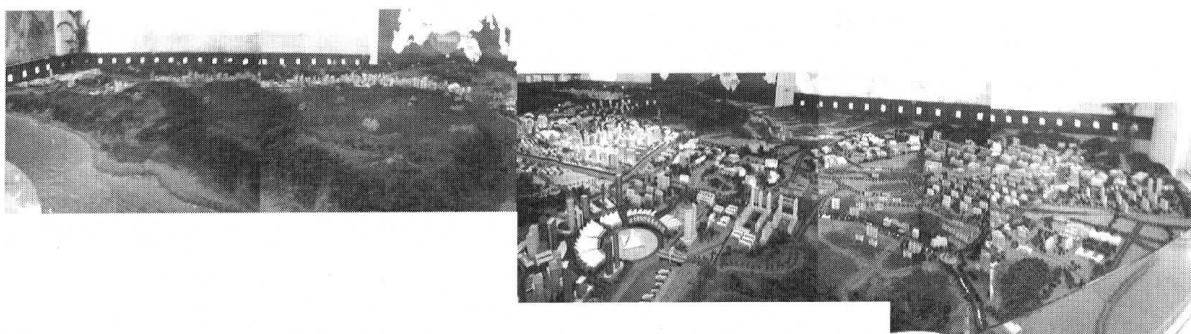


写真 2. 「旅順南路ソフトウェア産業帯」構想
（大連ソフトウェアパーク第二期、総面積 12 平方キロ）

－仙台支部からの寄稿－

幻の発会式と幻の会則

相談役 阿 部 源 祐（昭和 16 年卒専門 1 回）

月日の過ぎるのは早いもので、科会もはや創立 68 周年となった。改めて科会の過ぎ去りし思い出を辿りながら、将来に向かって、科会の伸びゆく理想の姿を考察してみよう。

科会は草刈先生のご指導で、工専第 1 回卒業生が母校を巣立った後の昭和 17 年 1 月 1 日に普通会員 32 名、特別会員 5 名で発足したのです。発会式は湯瀬ホテルで盛大に行う計画で資金を積立てておったが、大東亜戦争の勃発で行事は自粛し、積立金は陸海軍に寄付し、発会式は幻と消え去ったのです。しかし科会の理想実現のためには、一致協力の邁進あるのみでした。残念なことに学生は文部省通達で報国団（現行部活動）以外の団体の会員になるのは禁止されておったので、在校生は会員にできませんでした。戦時中も科会の活動は途絶えることなく昭和 18 年まで続けましたが、昭和 19 年からは遂に活動が出来なくなりました。

終戦の翌年、昭和 21 年 9 月に草刈先生は私と久保田先生に科会の再建を命じられました。先生の下宿で 3 人で会則の改正案を審議し、9 月 20 日の在盛卒業生懇親会で慎重討議して改正案を電気科会誌 6 号に発表し会員の賛否を問うたのです。同誌にも記載されている通り反対の意見がない時は原案の通り決定する事になっていたのです。反対者がなかったのです。会則は原案通り決定になった筈でした。

しかしその後科会の活動が停滞し、私も昭和 23 年 4 月釜石に転勤になり、科会業務に協力できない状態となりました。

かくして昭和 21 年 12 月科会再建の雑誌を発行してから三年のブランク時代を経て昭和 25

年 6 月に第 1 回総会がようやく開催されたのです。この総会で既に決定されていた会則が議題として提案され、修正のうえ可決されたようです。（私は釜石在住のため欠席）かくして再建後決定した会則は幻の如くきえさったのです。しかしここに大きな問題を残したのです。

草刈先生の創立当初からの希望であった卒業生と在校生を統合した科会が発足したと思っておったのに、第 1 回総会で決定された会則では在校生は准会員に変更になったのです。その理由は分かりません。もし在校生が正会員で、役員も選出されておったら科会の発展は現在と違ったものになっていただろうと考えて今でも残念です。戦後再建してから第 1 回総会までの 3 年間のブランクが、なぜおきたのか不思議でなりません。

最近科会の設立の理念を広く変更したらどうかという意見が聞かれるが、また早いような気がします。今科会に求められているのは活性化であろうと思われます。

そのためには①卒業生と在校生がともに正会員として活動。②特別会員からの理事は母校出身者にかぎらない。③役員会の開催数を多くする。等により活性化をはかり、その後に支援などを考えないと、「仏作って魂入れず」になるような気がします。

まとまらないことを書いたような気がします。草刈先生の念願であった在校生も正会員として登録して、科会の活性化と発展が出来ないものかと 模索しているこの頃です。

（この原稿は電気科会創立 50 周年記念誌に発表したエッセイを元にしています）

「人生是三相応」…生涯現役でありたい…

小 原 左武生（昭和 37 年電気卒）

私の生まれ昭和 12 年丑年、以来干支廻り 6 回を経過してしまいました。

定年後の「ライフスタイル」は…心身共に健全でアグレッシブな意欲の維持が第一と…定め日々楽しく過ごしています。その活動の一端を紹介させていただきます。

①健康維持増進

20 年間、全日本マスターズ陸上競技連盟に所属し、自主トレーニングメニュー・夏場はトラック中心（週 2 回）、冬場はスポーツセンターでのウエイトトレーニング（週 3 回）、ロードレース大会などに出場しながら体力の維持増進にこころがけてきました。

●各種陸上競技大会での記録

[自己最高記録]

100m 13 秒 10(H5/5) 200m 27 秒 37(H10/7)
400m 63 秒 3(H9/9) 800m 2 分 29 秒(H4/9)
走幅跳び 5m11(S50/11)

全国レベルでの入賞記録ではマスターズ 300m ハードル 6 位、走り幅跳び 4 位

全国スポーツリクリエーション大会 (H15/9)
100m 3 位 13 秒 49、200m 3 位 27 秒 81

70 代になって練習量、記録とも落ちてきており、100m15 秒、200m30 秒を切ることが年 1 回あればよい方です。自己記録更新をハードル・競歩競技にかけています。ロードレースのほうは、10 km 50 分台、ハーフは 1 時間 50 分台を

ウロチョロしています。フルマラソンは 35 キロ過ぎのペースダウンを克服しないと 4 時間切るのが無理のようになってしまいました。

②生涯学習指導者としての活動

平成 9 年 10 月宮城県教育庁生涯学習課「生涯学習指導者養成講座」を受講し、毎年この受講修了者を会員として受け入れ「NPO みやぎ生涯学習指導者・支援センター」理事として、この運営に携わっています。

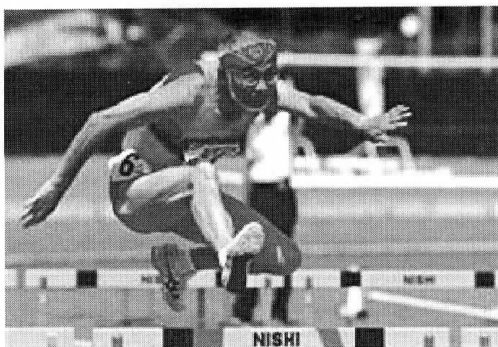
運営の主たるものは、東北大学 7 学部からの年間 6 講座「県民大学公開講座」、当センター主催の自主県民大学企画講座、一般県民を対象としたフォーラムなど年 1 回行っております。

③その他

地域活動として、町内会会長 7 年目に入り、地域学区内の行事サポート、行政へのパイプ役などを行っております。

常々これらのライフスタイルを通して感じる思いは、人それぞれの考えとライフスタイルをもち、多様なキャリアを持ち合わせ自己主張している人々をどう自分に受け止め折り合いをつけて往（い）けばいいのかと……。

禪宗に観る人生「三相応」の理（コトワリ）出会う、その人・その時・その処、この三面への対応が個々の人生の深まりを形成していく根幹をなすのであろう。



第29回全日本マスターズ陸上競技選手権宮崎大会



スポレク滋賀2008 マスターズ陸上競技大会

技術士資格の取得への取り組みについて

田 代 良 二（昭和 55 年電気卒）

1 はじめに

私は仙台市交通局に勤務しており、地下鉄車両の設計管理者に就いております。この業務を行うためには技術士の資格が必要なため、平成 9 年に電気電子部門を取得いたしました。その後平成 19、20 年に総合技術監理部門、機械部門も取得しました。技術士の概要と試験への取り組みを紹介させていただきます。

2 技術士制度

技術士制度は「科学技術に関する技術的専門知識と高等な応用能力及び豊富な実務経験を有し、公益を確保するため、高い倫理観を備えた優れた技術者」の育成を図るための国による技術者の認定制度で電気電子、情報工学、建設など 21 部門があり、現在約 6 万人の技術士がおります。人数としては建設部門、機械、電気電子の各部門で比較的多く、公共事業を行う建設系（電気工事含む）の企業、コンサルタント会社では必須の資格となっています。技術士の英文の名称は Professional Engineer であり、米国では業務上での強い権限を与えられています。このように実業界では高い評価を得ています。

3 試験の概要

1) 第一次試験

共通、適性、基礎、専門の 4 科目がありますが、大学理系学部の卒業者は共通科目が免除されます。なお日本技術者教育認定機構 (JABEE) が認定した教育課程を修了した者は第一次試験の合格者と同等とみなされます。

合格率は概ね 20%～40% となっています。

2) 第二次試験

大学卒業後、経験年数 7 年で受験でき、電気系の場合該当する技術部門と選択科目の範囲は次のとおりです。

・電気電子

発送変配電、電気応用、電子応用、情報通信、電気設備

・情報工学

コンピュータ科学、コンピュータ工学、ソフトウェア工学、情報システム・データ工学、情報ネットワーク

①筆記試験

・選択科目に関する問題

・技術部門全般の課題解決能力を問う問題

筆記試験に合格した者に対しては次のものが課せられます。

②技術的体験論文の提出（A 4 版 2 枚程度）

③口頭試問

合格率は電気電子部門で概ね 15%～20% です。

4 試験への取り組み

試験は第一次の専門科目に計算問題もあり大学卒業直後の方が有利であるといえます。

第二次試験は業務経験に基づいた試問が行われますので、就職して 7 年の経験が最低必要（大学院卒は 5 年）です。自分自身が中心となっていた研究、調査、設計など業務を複数こなしておくことも必要で、年齢的には概ね 35 歳過ぎから受験するのがよいと思います。実際受験者は 30 代～40 代が多く組織の中でも中堅クラスの人たちが受験しているようです。試験自体は平成 15 年から合格者の数を増やす方向にあり、以前よりやさしくなっています。

5 おわりに

わが国では科学技術創造立国を大きな方針として掲げていますが、この基礎をなす人材として、研究者としての博士とともに現場の実務者としての技術士の両者が車の両輪のような関係で技術の発展に寄与していくことが大いに期待されています。

今後テクノロジーは更にボーダーレス化していきますので、コンサルティング能力のある技術者である技術士の活躍の場が拡大していくものと期待されます。

出 会 い を 大 切 に

齋 藤 浩 美（平成 17 年電気電子卒）

平成 17 年度電気電子工学科卒業の齋藤浩美です。私は仙台電波高専を卒業後、専門分野を広げたいと思い岩手大学へ編入しました。

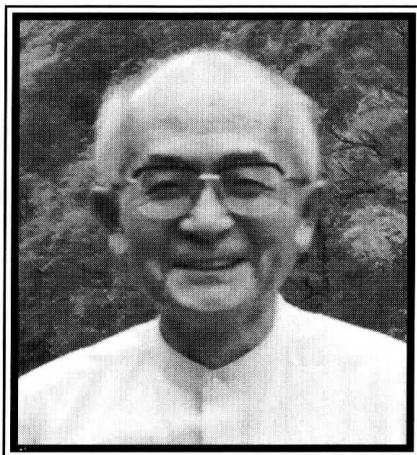
振り返ってみると 2 年間と短い期間ではありましたが、盛岡での生活は私にとってかけがえないものでした。編入当初は、高専とは違う座学中心に行われる授業、また、クラスの人数の多さ、更に初めての 1 人暮らしなど大学生生活の環境に戸惑いを感じていました。内気な性格も反映し、なかなか新生活になじめない自分に劣等感さえ覚えていました。慣れない環境での生活の支えとなったのは、私が住んでいたアパートの近くにあった高松の池でした。不思議なことに嫌なことがあっても池の周りを散歩すると気分が落ち着いたことを覚えています。盛岡の壮大な自然がわたしを包み込み、安らぎを与えてくれたのだと思います。3 年からの編入であったためサークル活動を行うのは大変かと思ひ、大学の近くにあるマクドナルド 4 号線田店（かつてはタケダスポーツがあったと聞いています。）でアルバイトをしていました。“お客様一人一人にとっておきの時間を提供したい” をモットーに最高のサービスとは何かを考えながら働くことの楽しさ、またファストフードを提供するということで従業員の団結力の大切さをマクドナルドで学ぶことができました。この経験は現在の仕事にも十分発揮されていると思います。4 年生になり藤原研究室への所属を希望した私は、静電気除電のテーマについて藤原先生から熱心な指導をいただきました。また、先生には進路相談にも親身になっていただき、NEC トーキンへ入社することができました。NEC トーキンは導電性高分子材料、マンガンスピネル材料、磁性材料、圧電材料な

どの独自の材料技術をベースとした「エネルギーデバイス」、「ネットワークデバイス」、「ファンクショナルデバイス」の 3 つの製品群で、ユビキタス化が進む現代社会のさまざまなシーンに、マーケットに、多彩なソリューションを提案しています。私は入社当初の 3 年間は宇都宮で電池の保護回路基板の開発に携わりました。2009 年からは仙台へ異動し、チョークコイル材料の造粒プロセス研究開発を主に行っています。これまでとは異なる分野の世界に飛び込んだため、知識の無い私は材料と格闘する日々を送っています。学生時代とは違い自分の自由になる時間が短いため、その中で勉強を行うことは大変ですが、効率良く時間を使おうと日々努力しています。このことは仕事だけではなく日常生活においても活かされ、良い経験をしているのだと思っています。

今年の 6 月に初めて電気電子情報科会仙台支部へ参加しました。そのときの御縁で、以前から興味を持っていた茶道を習い始めることができました。茶の稽古では「伝統的な型をもって、日々新たな心でのぞむ」という心構えがあります。先生の教えに従って初心を忘れることなく稽古を積み、やがて胸中に茶のこころの深遠に思いをいたす日がおとずれるそうです。そのこころを磨く稽古の一途にこそ、一服のお茶を囲む豊かな楽しみをえることができるのでしょう。茶道の世界は想像以上に奥深いものであることを知りました。

岩手大学へ編入したことで、多くの人との出会いがあり、色々なことを学ぶことが出来ました。今後の人生においても多くの出会いや気づきを大切に、成長していきたいと切望しています。

細川元会長を偲んで



弔 辞

謹んで「岩手大学電気電子情報科会」相談役元会長 故細川哲男様の御霊前にお礼とお別れの言葉を申し上げます。

先週金曜日の午後メールを開いた私は細川さんがお亡くなりになったとの文面に大変驚いてしまいました。たった1週間前の13日に、会の理事会を工学部で行った際もお元気でご出席頂いておりましたので信じる事が出来ませんでした。奥様を始めご家族の皆様の驚きと突然の悲しみは察するに余りあります。

細川さんは、岩手大学工学部の前身である盛岡工業専門学校を戦後の混乱が続く昭和24年3月にご卒業になって当時の日本電信電話公社現在のNTTに奉職され、以来日本の通信事業の再建と発展にご活躍なさいました。東京、仙台など全国各地でご勤務のあと岩手でご勤務なさるようになると母校岩手大学工学部電気系工学科の同窓会である「電気科会」の活動を熱心に支援して下さいました。昭和60年からは会の理事としてご活躍され、平成4年10月には「電気科会創立50周年記念誌」の編集委員長として350ページ余りに及ぶ大作を編さんされました。この記念誌は電気科会の誇る記念誌となっております。そして平成8年には、佐々木浩会長の後をうけて会長にご就任されました。

平成4年、岩手大学工学部では大学院博士課程の設置を目指し大きな改組が行われましたがそれにより電気工学科、電子工学科、情報工学科という電気系3学科も学科の分離統合再編が行われ、講義内容の大幅変更などが生じたことから、構成会員の範囲や会の名称などがしばしば問題となっていました。細川会長は、これまで「岩手大学電気科会」と称していた会の名称をどうするかということも含め「科会のあり方検討委員会を」設置し、幾度となく行われた話し合いの結果を次の太田原会長に引き継がれました。その結果としてまもなく名称を「岩手大学電気電子情報科会」とし会員には情報工学科の卒業生も加わるということが正式に決まり、長い間の懸案事項が解決して新しい時代の同窓会として発展するものとなりました。

会長を退かれた細川さんは今度は太田原会長のもとで設置された「電気電子情報科会運営検討委員会」の委員長として会の財政再建計画や運営の改革にも力を注がれました。

更に細川さんは恩師で工学部の前身盛岡高等工業学校創設当初からの電気科科長で工学部長もお努めになられた故草刈遜先生の「ご生誕100年記念事業」の際も募金寄付者の免税手続きで盛岡税務署や仙台国税局と何度も折衝を重ねたくさんの寄付金が集まるよう頑張っておられたことを思い出します。

昭和17年1月1日に工学部の前身である盛岡高等工業学校電気科第1回卒業生32名と特別会員5名で発足した電気科会は、以来67年を経過し現在会員5000名を数える大きな会となりましたがここに至るまでには様々な困難を乗り越えてきました。その中で細川さんのご功績は非常に大きく 会員一同深く感謝しているところです。まだまだご指導をいただけたと思っていた矢先、大変残念でなりません。細川さんの同窓会にかける情熱を受け継ぎ発展させてゆく覚悟です。いつまでも見守って下さるようお願いいたします。

ここに会を代表してお礼を申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

平成21年6月23日

岩手大学電気電子情報科会会長 柏 葉 安兵衛

細川君を偲ぶ

太田圭一（昭和24年卒専門8回）

昭和21年5月31日は我々工専八回生の入学式の日である。黒沢尻中学（現岩手県立黒沢尻北高）出身の細川哲男君と初めて知り合ったのもその日であった。爾来60有余年の長い付き合いだった。この間の君の友情に心から感謝している。思えば工専の3年間は戦後の混乱期で食糧難と物が無い時代だったが、新しい変化の息吹と解放感に満ちた時代でもあった。そんな学生時代を過したことが我がクラスの連帯感を強くしているのかも知れない。ノミの多い教室での講義、水抵抗を使った実験、一関の水害の救援活動、ドブロク作りから始まるコンパなど今では考えられないことだらけだが、それでもあの3年間は懐かしいし楽しかった。

学生時代の細川君は目立つ方ではないが真面目で人付き合いがよく誰からも好かれる円満な人柄だった。勉強だけでなく映画や演劇関係のサークルに入って活動したが、野球部にも所属するスポーツマンでもあった。学業成績優秀な彼は（誰かが云っていた 卒業時トップだったと…）NTTに就職し社会人としても立派な仕事をしたが、地元に戻って来てからクラスの幹事役を引き受けてくれ、いろいろ級友の面倒を見てくれた。何事にも緻密な計画を立て、得意のパソコンで詳しい資料を作り、こまめに連絡を取ってくれた。昭和59年の卒業35周年記念のクラス会から毎年続いて来たのは偏えに細川君の尽力のお蔭であり同級生一同いつも心から君に感謝していた。また、卒業50周年の平成11年には同級生の記録と思い出をまとめて「賛歌50年」を作ったが、これを作るに当っても故曾根君と君の協力があってこそ出来たもので、本当にいい思い出を作ってくれて有難く思っている。

そろそろ年齢だからいつまでクラス会をやるかという話題になった時、卒業60周年の今年までは頑張ろうというのが君の念願だったのに、その日を迎えることなく急逝し、さぞかし無念だったと思う。君の思いに応えるべく11

月12日に卒業60周年記念のクラス会を無事やることが出来た。奇しくも前回別れる時に生きていたら来年また会おうと言葉を交わした仲間から君だけが欠けてしまい、お酒が入って少しトーンの上がった君の明るい声が聞かれなかったのがとても残念で寂しかった。それでもまた来年も集まろうということになったので君の後を継いで頑張りたいと思っている。

君とは家が近いので最近はお宅でクラス会の相談をするのが恒例になっていたが、ほとんど君がやってくれるので私はただ手伝いをするだけでよかったのに、今回幹事をやってみて今までの君の苦勞がよく判った。打合せが済むと世相や社会問題、家族のことやお互いの健康のことなどなんでも語り合う仲だったが、私にとってはそれよりもパソコンのことがなんでも聞ける先生であった。パソコンにストライキを起されると電話で尋ね、それでも駄目だと家まで見に来てもらったことも何度かあった。君が亡くなった時、真っ先に思ったのは『困った、これから誰に聞けばいいだろう』と云うことだった。調子が悪くなるたび君の有難みを痛感している。

まだいろいろ記したいこともあるが、我々が学生時代に作った文芸誌「若草」に載っていた君の俳句を紹介してこの文を終えたい。

「青空に描きし円弧ホームラン」 T・H 生

最後に改めて細川哲男君のご冥福を心から祈念してやみません。



太田圭一（左）と 故 細川哲男君（右）

細川さんのご逝去を悼む

太田原 功（昭和 30 年電気卒）

円満で穏やかなお人柄の細川さん、卒業年次を問わず同窓生の皆さんから信頼され、愛されていた細川さんは平成 21 年 6 月 19 日忽然と旅立たれました。同日、細川さんのご逝去を知らせるメールには驚き、到底信じる事が出来ませんでした。僅か 6 日前の 6 月 13 日、午前は岩手大学電気電子情報科会理事会があり、午後は岩手大学創立 60 周年記念行事があって元気なお姿に接したばかりでしたから、信じられる道理がありません。でもそれは事実でした。そして 6 月 23 日のご葬儀、幽明境を異にされました。

細川さんは同窓会活動、特に電気科会活動に献身的にご尽力され、総会は勿論のこと、役員会、理事会も殆ど欠かさずに出席しておられ、貴重なご意見を頂きました。公私共に思い出は尽きませんが、科会に残された二つの業績のみに絞って思いを新たにしておきます。

平成 8 年 6 月の定期総会で会長に推挙され、翌平成 9 年「電気科会あり方等検討委員会（委員長：山崎時男氏）」を立ち上げられました。その中の重要課題の一つ、「岩手大学電気科会」の名称を、時代の推移に合せて変更する難問題に取り組まれて「岩手大学電気電子情報科会」に改称する基礎を作られました（平成 11 年 6 月定期総会で名称変更を正式決定）。電気工学科が電子工学科を産み（昭和 41 年 4 月）、この 2 学科を基礎として情報工学科を産んだ（昭和 50 年 4 月）歴史的事実があります。その後電気工学科と電子工学科が統合改組されて電気電子工学科となり、情報工学科は情報システム工学科と称する改組がありましたが、平成 21 年 4 月電気電子工学科と情報システム工学科が統合改組されて電気電子情報システム工学科として新しい教育体制となりました。科会の名称を変更してから丁度 10 年を経た平成 21 年、同窓

会の名称と母体の学科名が明白に調和したことに、改めて細川先輩の洞察の深さに思いを馳せております。

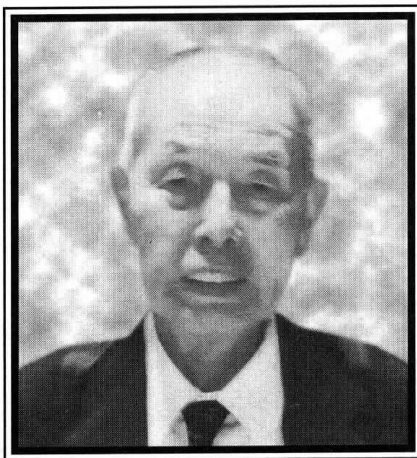
平成 14 年に実施された草刈遜先生ご生誕 100 年記念行事に際しては、記念事業実行委員会募金委員長としてご尽力されました。特に、免税措置実現のために、再三再四盛岡税務署と仙台国税局に足を運ばれて、免税を実現させたことは記念事業成功の鍵でありました。記念事業の成果として、専門第 1 回卒、佐藤利三郎先生の個人寄贈による草刈先生の胸像が工学部正面玄関を飾り、平成 15 年度卒業生から学部卒業生に授与されている草刈賞が、後輩の学生生活に大きな刺激を与えております。平成 14 年 10 月、仙台市で行われた故草刈先生の追悼法要に 100 余名の同窓生が参加して先生を偲びました。

平成 21 年 6 月 1 日母校岩手大学創立 60 周年を期して創設された岩手大学同窓会連合（四学部同窓会と大学当局を会員とする協議機関）の設立に関しても貴重なご意見を賜りましてありがとうございました。同窓会連合の設立によって、四学部同窓会が学内における市民権を得たことにもなり、その意義は大きいと思っております。今後の同窓会活動は、全学的見地も視野に入れつつ活性化することになるでしょう。

同窓会のあるべき姿を語り合い、時には私の下手なゴルフにお付き合いを頂くなど、年代の近い先輩としてご親交頂きました。車を運転しない細川さんを時折お宅までお送りしながらの意見交換もありました。あれもこれも今は思い出でとしながら、日常の中に生かして参りたいと思っております。

科会への業績を称え、個人的な親交を謝してご冥福を祈ります。

小澤元会長を偲んで



弔 辞

謹んで「岩手大学電気電子情報科会」相談役元会長 故小澤甚一郎様の御霊前にお礼とお別れの言葉を申し上げます。昨日、日曜日の3時ころ小澤さんがお亡くなりになったとのお電話を先輩の相馬重信さんからいただき大変驚いてしまいました。今年の3月に工学部電気電子工学科と情報システム工学科の新卒業生を同窓会に歓迎する会にはお元氣でご出席なされておりましたので、俄かに信じることが出来ませんでした。ご家族の皆様の悲しみは察するに余りあります。

小澤さんは、岩手大学工学部の前身である盛岡高等工業学校第3回生として昭和18年9月にご卒業になりました。3年の学業期間を6カ月繰り上げての卒業式ですので太平洋戦争がいかに逼迫していたのか想像されます。当時の電気科科长草刈遜先生のお計らいで日本放送電株株式会社に就職が決まっていたものの、すぐに海軍飛行予備学生として招集され戦闘機隊員として九州・沖縄方面に転戦されたとうかがっております。終戦復員後は現在の東北電力株式会社において盛岡、青森、仙台などで長年ご勤務され、東北地方の電気エネルギーの安定供給に多大なご貢献をなされました。

「岩手大学電気電子情報科会」は現在の岩手大学工学部電気系工学科の同窓会で、初代会長は科長の草刈先生、その後は第1回卒業生の阿部源祐さんでした。信望の厚い小澤さんは阿部さんの後任として昭和30年6月推されて3代目の会長にご就任されました。母校愛が強く同窓会活動に熱心な小澤さんは、戦後の混乱の影響がまだ残っている時期に会員同士の連携を強め、お互いの繁栄を図り、母校の発展にご尽力なされました。特に大学として貴重な財産である学術図書4000冊を東北大学から岩手大学に移管するにあたり、その費用を電気同窓会で負担することを決めて実現させ、その後の電気関係学科の研究に大きく貢献なさいました。また工学部全体の同窓会「一祐会」との関係について各学科の同窓会をベースとした学部同窓会という構想をお考えでした。今日の「一祐会」あるいは今年発足した「岩手大学同窓会連合」を考えると小澤さんのお考えになっておられた同窓会組織が実現されているように思え、小澤さんの先見の明に感服する次第です。

会長を退かれても小澤さんは「科会」の活動を熱心に支援して下さいました。相談役として理事会始め各種行事には率先してご出席くださり貴重なご意見ご提案をいただきました。特に新しい卒業生を会員として迎える新入会員歓迎会では若い諸君に貴重な人生訓を熱心にお話になられ感銘を与えてくださいました。また新しい交通手段として飛行艇というユニークな手段をご提案になり、少年のような若々しさと情熱的に話し下さったお姿が浮かんで参ります。

小澤さんはしばらく前から何度となく大病に見舞われながらも、それを克服して私たちに大変な勇気と希望を与えてくださいました。

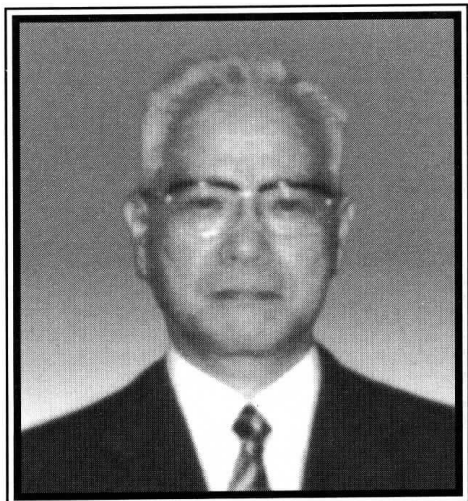
昭和17年1月1日に工学部の前身である盛岡高等工業学校電気科第1回卒業生32名と特別会員5名で発足した「電気科会」は、間もなく68年になろうとしていますが、現在会員5000名を数える大きな会となりました。ここに至るまでには様々な困難を乗り越えてきましたが、その中で小澤さんのご功績は非常に大きく会員一同深く感謝しているところです。まだまだご指導をいただけたらと思っておりましたのに大変残念でなりません。小澤さんの同窓会にかけの情熱を受け継ぎ発展させてゆく覚悟です。いつまでも見守って下さるようお願いいたします。

ここに会を代表してお礼を申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

平成21年12月28日

岩手大学電気電子情報科会会長 柏 葉 安兵衛

百足先生を偲んで



大正14年 9月	東京都で生誕
昭和20年 3月	仙台育英中学校卒業
20年 5月	陸軍入隊
20年 8月	シベリヤに抑留
23年12月	シベリヤから復員
25年10月	新制大学入学資格認定試験合格
26年 4月	東北大学第二教養部(工学部)入学
30年 3月	東北大学工学部電気工学科卒業
30年 4月	日新電気株式会社入社
30年10月	結婚
38年 5月	電気学会より電気学術振興賞(進歩賞)受賞
39年 6月	日新電気株式会社退社
39年 7月	岩手大学工学部電気工学科助教授
平成3年 3月	岩手大学定年退官
20年 5月 7日	逝去

百足恒彦先生を偲んで

久保田 賢 二 (昭和 42 年電気卒)

百足恒彦先生には平成 20 年 5 月 7 日逝去されました。敬愛する先生に薫陶を受けた私達にとって痛恨の極みです。

ご遺族のお話では、先生には数年前から時々結石で痛みがあり、近くの医院に行ったり少しすると自然に治まったりしていたようです。奥様のお世話を好くし、亡くなられる 2 か月前まで大好きだったスキーを楽しんでおられたとのこと。4 月 4 日に入院されたときも結石だけと思っていたのが、医師から「肺機能も低下しているようなので、少し落ち着いたら検査をしましょう」と言われていたとのことでした。

同年 4 月 2 日だったと思いますが、盛岡市内の眼科クリニックでお会いし、ご挨拶申し上げたのが最後のお別れになってしまいました。診

察が終わって椅子に腰掛けて支払い順番を待っていたところ、受付の方が「百足恒彦さん」と呼んでいる声が聞こえ、はっとして見渡したところ、まさに先生が奥の方のソファから立ち上がったのでした。先生も診察を終えて会計の順番を待っていたのでした。先生が支払いを終えてからご挨拶申し上げ、少しの時間お話を伺ったのですが、そのとき「免許証の更新に行ったら視力がすごく落ちていたんですよ。更新は出来たんだけど、来月白内障の手術をすることになりました」と仰っていて、また「運動のために歩いているんだけど、この頃こんな小さな小学生がどんどん追い越して行くんですよ。いやになってしまう…」と言いながら開いた右手をご自分の胸近くの高さで水平に振っていた

様子が思い出されます。そして少し前までの先生は、散歩のとき追いつき追い抜きこそすれ、追い越されることはなかったのだらうと、あらためて小柄な先生がいつも早足で歩いておられた姿が思い出されます。また、急に「あなたには本当にお世話になりました」と仰しゃって頭を下げられたのにはびっくりしました。「歩いて帰ります。それでは…」と言って小さなリュックを背に玄関を出て行かれました。私も終わって職場に帰る途中、高松交差点で向かい側の歩道を小さなリュックを背に右折してご自宅へと帰って行く先生の後姿を遠目にしたのが最後となってしまいました。

先生は終戦3ヶ月前の昭和20年5月に陸軍入隊、同年8月から3年間以上もシベリヤに抑留され、復員後制度化されて間もない大検に合格、翌年東北大学に入学して、30年3月同工学部電気工学科卒業、同年4月に日進電気株式会社に入社されました。

日新電機では主として電力系統に関する応用計測の研究に従事されていたとお聞きしております。昭和38年5月に「コロナ損失測定装置」の研究開発の功績によって電気学会より電気学術振興賞（進歩賞）を授与されました。

昭和39年6月に日新電気を退社されて、同年7月岩手大学に助教授として赴任されました。岩手大学では電気工学科の、赴任された当時はAコースと呼ばれていた電力発生分配コース、講座制になってからは電力工学講座に長らく所属されて、私達15回生は「送電及び配電」の講義を受けました。難解なところは板書してわかり易く丁寧な解説して下さり、厳しくも優しいお人柄と併せて大変好評のご講義でした。

先生は多分野に精通しておられ、ご研究も電

力系統に関する応用計測のみならず、電子回路、音響等々幅広いものでした。電気の分野だけでなく機械に関しても造詣が深く、調子の悪くなった車のエンジンを分解し、部品を補修したり交換したりして、組立て直して復旧したというお話や、そしてまた音響マニアでご自宅には防振機能を持たせたプレーヤ台を設置したというお話を伺ったような気がします。会員の皆さんの中には、先生のお宅で音楽を聴かせていただきながら、目を輝かせての先生の音楽談義をお聞きになった方が多数おられることと思います。

先生は昭和53年4月に電気通信工学講座に移られ、直属の部下としてお仕えする立場になりました。最初の数年間は事情により、また先生のご希望もあって講座として一緒に活動はしませんでした。昭和57年、当時学科及び電気系の主任教授であられた志田純一先生のお計らいで、学生の居室を講座として一緒にし、以降先生のご退官まで9年間、公私共に大変お世話を戴きました。毎年夏に学生を引率しての気仙沼大島、男鹿半島、猪苗代湖等へ講座の合宿研修旅行をし、冬にはスキー、初夏に姫神山に登ったこともありました。楽しい思い出で一杯です。

先生ご自身思いもしなかったことでありましょう僅か1ヶ月の入院生活で百足先生には永遠に帰らぬ人となってしまわれました。寂しい限りではありますが、今は先生のご冥福をお祈り申し上げるばかりです。どうぞ安らかにお眠り下さい。

最後に、御奥様始めご遺族皆様のご健勝とご発展を念じ、そして本会会員皆様のご活躍を祈り申し上げ、筆を擱きます。

平成31年度以降の草刈賞継続を決定 草刈賞充実のためのご寄付を歓迎

平成21年度総会（平成21年6月27日開催）において、冒頭に掲げた草刈賞運用方針を決定致しました。即ち、

1. **草刈賞副賞新設を決定：**草刈賞として、賞状と草刈先生の胸像を模したメダルを贈呈しておりますが、平成21年度以降の受賞者に副賞として「記念品」を贈呈することに致しました。平成21年度は置時計の予定です。
2. **平成31年度以降の草刈賞継続を決定：**草刈賞授与の予定期間は平成16年度から約10年間でした。佐藤淳先生のご寄付等によって当初計画が延長出来ておりますが、平成30年度で原資が無くなります。この件について鋭意検討を重ねた結果、後輩学生が「充実した学生生活」に取り組む動機付けとなる可能性が大きいと判断し、経常費の積み立てによる平成31年度から40年度までの継続を決定致しました。
3. **草刈賞充実のためのご寄付を歓迎：**経常費が科会基金を取り崩している現状での草刈賞継続決定を支えるために、会員各位の年会費納入を切にお願い致します。更に、自発的なご寄付を歓迎致します。ご寄附分は経常費積立額を縮減する予定です。
草刈賞基金として国庫に直接納付した場合には免税対象となります。

◎以上の3項目決定に当って、平成20年度総会において新設された草刈賞委員会が提案し、これを理事会が慎重審議の上修正を加えて21年度総会に提案した案件であります。以下に詳細な運用計画を掲載致しました。ご一読頂いて、各位のご理解と積極的なご協力をお願い申し上げます。

- I. 平成20年度末（草刈賞6年経過）、基金残 987,950円、メダル残37個、表彰状残75枚。
- II. 草刈賞副賞の新設（平成21年度～平成23年度の計画）；従前通り2学科から3名ずつの推薦とする。
副賞として1万円を計上し、「平成〇〇年度草刈賞副賞」と銘記した置時計（等）を授与する。
 - ・筆耕料 1,050円×18名 = 18,900円
 - ・副賞 10,000円×18名 = 180,000円
 - ・平成23年度末（草刈賞9年経過）：基金残 789,050円、メダル残19個、表彰状残57枚
- III. 草刈賞副賞の継続（平成24年度～30年度）；平成21年4月の改組により、平成24年度卒業生から電気電子・情報システム工学科（定員120名）1学科のみの卒業生となることから、1学科5名程度の推薦（2コース2名ずつ+1名）とし、「II」と同様の副賞を贈る。
 - ・筆耕料 1,050円×35名 = 36,750円
 - ・副賞 10,000円×35名 = 350,000円
 - ・メダル鑄造料 10,000円×40個 = 400,000円

☆平成30年度末資金等の残存状況：資金 2,300円、メダル 24個、表彰状 22枚
- IV. 平成31年度以降は経常費予算に積み立てて草刈賞を継続する（当面、平成40年度までの10年間）；
積立期間は平成22年度から同36年度までとして、適時大学に草刈賞基金として寄付する。
（必要経費と毎年度当たりの予算額）
 - メダル 50 - 24 = 26 → 30個×10,000円 = 300,000円①、副賞10,000円×50人 = 500,000円②
 - 表彰状 50 - 22 = 28 → 35枚×7,000円 = 245,000円③、筆耕料等の雑経費 50,000円④
 - 以上10年分の必要経費 ①～④の合計 1,095,000円／15年（73,000円／年）

以上

第6回（平成20年度）草刈賞受賞者

《電気電子工学科》

電気電子工学科 井 関 肇



4月1日。私は東北電力に入社して、社会人としての新たな一歩を踏み出しました。会社に勤めだして、新しい土地や寮での共同生活など大学生の時とは生活がうって変わりました。仕事はわからないことだらけで大変ですが、お客さまに電気を届ける使命感と仕事を完成させたときの達成感を感じて日々頑張っています。

今、こうして充実した毎日を送れているのも、大学生のときに自らの経験から学んだことが活かしているからだと感じます。小さい時からかけっこが得意だった私は、中学生のときに陸上競技を始め、大学でも走ることを続けて、マラソン大会や駅伝大会に出場してきました。大会

に向けて毎日 30 km以上走りこんで練習を積み、徐々に少しずつ速く走れるようになってきました。そして大学最後のレースで盛岡市の代表として駅伝を走ることができ、入賞することができました。こういった結果を残すことができたのも、毎日、欠かさず練習してきたからだと思います。“継続は力なり”とは正にその通りで、マラソンを通して毎日の積み重ねの大切さを学びました。

積み重ねの大切さは、マラソンに限ったことではなく仕事や普段の私生活にも通じることだと思います。不器用で仕事を覚えるのが遅い私ですが、何事にも根気強く取り組むことで仕事も徐々に覚えていき、今では仕事にやりがいを感じています。毎日の積み重ねの大切さを忘れずに、これからも仕事も趣味のマラソンもがんばっていきたいです。

《情報システム工学科》

情報システム工学科 本 木 友 理



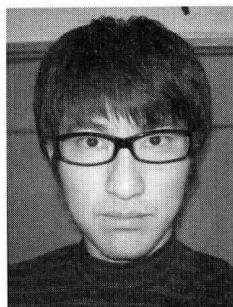
岩手大学を卒業してから、そして草刈賞を受賞してから早1年が経とうとしております。草刈賞に選ばれたことは4年間の活動を認めていただいたということで、嬉しさと同時に大変光栄なことと感じております。

私の受賞理由の一つであるサークル活動では、GHK 岩大放送研究部に所属し、構内ラジオやコミュニティFMでの番組制作に携わりました。番組内容の一つとして、様々な分野で活躍する学生をゲストにお呼びしインタビューすることもありました。私にとって未知の分野の方々にお話を伺うことは、自らの視野を広げる良い機会となり貴重な経験となりました。ま

た、ラジオのパーソナリティとして人の話を聴き、自分の感想を述べるということは仕事をする上でも重要なことです。活動を通してこれらを身に付けることができたことは、今の私にとって大きな自信に繋がっています。

また、学友会中央委員会では主にサークル活動の支援をしており、その中でも私は会計部長として金銭面でのサポートをしていました。大金を扱う故、責任を感じる場面も多々ありましたが、各サークルに対する活動援助金の配当が完了したときの達成感は今でも忘れられません。

現在はインフラ系のIT企業に就職し、業務に励んでおります。まだ分からないことばかりで苦戦する毎日ですが、大学時代の経験を活かし1日でも早く一人前のSEとなれるよう努力していく所存です。



この度は草刈賞という名誉ある賞を頂き、とてもうれしく思います。

私が草刈賞を受賞することができたのは、ET ロボコンへ参加したことを評価されたからです。ET ロボコンは、レゴ社のマインドストームというロボットにプログラミングをし、コース上を走行させてタイムを競います。ここで競うのはタイムだけでなく、ソフトウェアの設計図の出来も競います。設計にはモデリング言語の UML といものを利用します。現在の組み込み系開発では、設計段階でどれだけ品質の高いものができるかが重要です。品質の高いソフトとはバグの少ないソフトといっても過言ではありません。正確でわかりやすい設計図

を作る事が高品質なソフトを作るために重要であることをこのロボコンで痛いほど味わいました。結果として走行部門では3位を取る事ができ、大学生活に花を添えることができました。

ET ロボコンでの経験は、現在就職した会社で特に重要な知識として役にたっています。まだまだ現場でモデリング言語を直接使うことはありませんが、将来的にはC言語と併用、置き換わる形で使われていくと思います。今後も自分で理解を深め、より品質のよいものを作っていけたらいいな、と思います。

最後に研究室で迷惑ばかりかけ、お世話になった西谷先生と平山先生に心からお礼を申し上げます。また、ET ロボコンでご指導いただいた佐藤先生、佐藤研の佐藤先輩にもこの場を借りてお礼申し上げます。



草刈メダルと賞状

これと同じメダルを記念にほしいという会員の希望により用意しました。1個6,000円（通し番号なし、賞状なし）。
購入希望の方は事務局まで

《支部だより》

平成 21 年度東京支部報告

東京支部長 澤 藤 隆 一（昭和 47 年電気卒）

2007 年のサブプライムローン破綻から 2008 年のリーマンショックを経て、2009 年は世界同時不況となって、東京支部会員にも様々な影響が出ました。現役世代は失職したり転勤したり、概ね良い話は残念ながら聞かれませんでした。あまりに厳しい経済環境下、予定していた東京支部大会は時機を逸してしまいました。他の活動はホームページに一覧表で詳しく載せております。金属物性科会やきたかみ会（資源・土木）、東機会（機械）総会の内容も掲載して、言わば一祐会東京支部広報的役割を果たしております。インターネット検索エンジンで IUEEITOKYO と入力しますと出てきます。

同窓会の存在意義としては、会員の皆様に情報を提供し、会員相互の交流や扶助、親睦を図り、大学を支援することであると考えます。そのため岩手大学が行う「新技術説明会」や「産学官連携交流会」にも積極的に参加すべく会員各位にメールを送りました。またいわてネットワークシステム (INS) の行事へも会員参加を呼び掛けております。一祐会傘下の他会との交流や、岩手県、盛岡市東京事務所との協力体制も構築してきました。1 月早々の岩手大学・科学技術振興機構共催の新技術説明会では、講演者であった科会会長の柏葉先生を囲んで懇親会も行いました。支部主催行事では、熟年世代を主ターゲットに環境にやさしい暮らしを実践している吉岡正修様（S37 卒）のセミナーを 5 月に大井町駅前の「きゅりあん」で行いました。きたかみ会の千葉さんも参加してくれました。6 月の岩手大学開学 60 周年記念式典、祝賀会、記念講演会、展示会、ホームカミングデーにも参加を呼び掛けました。今年は本部総会が仙台で開かれ、澤藤支部長、柴田、狩野両副支部長が参加しました。平成 21 年は大学や INS 行事 9 件、科会本部行事 5 件、支部活動 3 件、一祐



5 月 13 日セミナー講師の吉岡さん（左）と澤藤支部長

会関係 3 件、岩手県や盛岡市関係の行事参加や会員への案内を 12 件行いました。金属物性科会ときたかみ会の総会に来賓参加し、東京もりおかふるさと会で在京の多くの同窓会との交流を深めました。盛岡市と岩手大学との産学官連携の M I U サポートとしても活動しました。岩手大学での 3 月の新会員歓迎会には狩野副支部長、5 月の一祐会総会には柴田副支部長を派遣しました。

特別なこととしては、「在京盛岡広域産業人会」という組織を立ち上げることとなり、当支部の活動が評価されたのか、澤藤に会長の役目が回ってきました。産業人と言うと現役で且つある程度の肩書きがある人というイメージがあるようですが、そんなことはないと広報して百数十名の方が集まってくれました。一祐会関係の方も結構集まってくれました。盛岡広域 8 市町村への貢献が目的のため、岩手大学がバックアップしており、11 月の設立総会の記念講演は藤井克己学長が来て下さいました。今後当支部会員の皆様がより多く参加して頂けるようお願いします。

平成 22 年も厳しい経済情勢が予想されます。支部大会はもちろん、セミナーや支部会員への情報提供、懇親会など、当支部を支える元気な高齢会員が楽しみに参加できる催し物を各種企画しますので、どうぞご期待ください。

平成 21 年度仙台支部報告

仙台支部長 齋 藤 健（昭和 38 年電気卒）

今年度の仙台支部総会は、平成 21 年 6 月 27 日（土）本部総会に先立って開催されました。この総会で支部の会計年度の期間が 6 月 1 日から翌年 5 月 31 日に変更されました。

仙台支部では、平成 18 年度に本部の支部活性化特別費の支給を受けてから、支部活性化事業を展開しています。その骨子は、①会員が 4 ヶ月に一度ぐらいの頻度で顔を合わせられるよう、10 月、1 月、4 月に会員定例集会を開催すること、②長寿者を祝う会の開催です。今年度の定例集会の開催状況は、第 7 回（通算）は平成 21 年 1 月 17 日（土）ハーネル仙台で新年会としました。また臨時例会として、平成 21 年 3 月 14 日（土）昭和 40 年電気卒千葉浩克会員（表千家教授千葉宗浄）のご好意で茶事（茶会）体験会を開催しました。第 8 回は平成 21 年 4 月 18 日（土）に、お花見と長寿者を祝う会とかねて開催し、第 9 回は平成 21 年 10 月 31 日（土）ハーネル仙台で「技術士制度の概要と試験につ

いて」昭和 55 年電気卒の田代良二会員から講演を頂きました。

長寿者を祝う会は、専門 2 回卒～6 回卒の会員（31 名の方が対象）に声掛けをし、3 名の方がご出席され、平成 21 年 4 月 18 日（土）ハーネル仙台で開催しました。これらの行事は 22 年度以降も継続開催していく予定ですが、多くの方々のご参加をお待ちしております。

平成 22 年度の支部総会は平成 22 年 6 月 26 日（土）ハーネル仙台で開催します。

定例会員集会は原則、10 月、1 月、4 月の第 4 土曜日午後 3 時からハーネル仙台で開催することとしています。また、長寿者を祝う会は 4 月の定例会員集会に併せて開催する予定です。（対象は専門 7 回生～傘寿を迎えられる方）詳細が決まり次第東京支部ホームページ等でご案内しますが、支部行事全般などに対する御問い合わせは次のメールアドレスにお願いします。
saitoken@siren.ocn.ne.jp



平成 21 年度 仙台支部長寿を祝う会

平成 21 年 4 月 18 日
ハーネル仙台

前列左から 3 人目

池野九平会員 専門 3

小島左京会員 専門 5

砂子田實会員 専門 6

平成 21 年度盛岡支部報告

一昨年、盛岡支部長を引き受けましたが、わたくし喪中だったので今年度からすこしづつ活動しようと思っています。まず、支部の会員名簿は、すでに前支部長の歳弘健さんが作成しておられました。歳弘さんのお話では盛岡と近郊に居住する会員は名簿上では 260 名ほどいることになっておりますが、若い方の中には学生時代の住所のままであったり、高齢の方は療養されておられたりで、お誘いしても反応のない方が相当数あるということでした。そのようなことを念頭において私の初仕事として科会盛岡支部の新年会を行いました。

○日時：平成 22 年 1 月 23 日(土)

午後 0 時 30 分より

○会場：国保会館（盛岡市大沢川原 3-7）

当日の午前中には科会本部の理事会がありましたので、新年会にも柏葉安兵衛会長、東京支

盛岡支部長 旗 福 寛（昭和 38 年電気卒）

部長澤藤隆一さん、仙台から支部長齋藤健さんと阿部源祐相談役が出席され総勢 21 名の参加をいただきました。本新年会では本部と共催して、平成 21 年 3 月に定年退職された道上修先生、田山典男先生、久保田賢二先生の三先生をご招待して慰労と感謝の意を表しました。残念ながら田山先生は海外旅行中とのことで欠席でしたが柏葉会長から両先生の御略歴の紹介があり花束を贈呈いたしました。乾杯は第 1 回生阿部源祐相談役にお願いしました。また、太田原相談役からは岩手大学同窓会連合の会長として独立行政法人となった大学の後方支援としての同窓会の意義を強調されました。中締は最も若い卒業生ということで、探したら平成 3 年情報卒の木村彰男先生（科会理事）でした。もっともっと若い方々の参加が望まれるところです。



前列左から

齋藤(S38、仙台支部長)、澤藤(S47、東京支部長)、佐々木喜八郎(S28、相談役)、道上先生、柏葉(S38、会長)、久保田先生(S42)、阿部源祐(S16、相談役)、太田原(S30、相談役)、山崎(S26、元会長)

後列左から

長田(S62、理事)、木村(H3、理事)、旗福(S38、支部長)、鳥谷部(S56、副会長)、小野寺(S29、理事)、及川(S38、会計監査)、武田(S41)、吉田(S41)、佐藤(S57)、杉本(S33)、南幅(S45、副会長)、柳橋(S45、理事)

花束を抱く道上先生と久保田先生

平成22年1月23日
国保会館

平成 21 年度電気電子情報科会総会

平成 21 年度総会は、平成 21 年 6 月 27 日(土)、仙台市ハーネル仙台において 46 人の出席で開催されました。

総会は本部盛岡で 2 年間行い、次は東京支部で、また盛岡で 2 年、そして仙台支部でという順番になっており、本年度は仙台での年でした。

長田洋理事の司会で始まり、柏葉安兵衛会長のあいさつに続き、電気電子・情報システム工学科長藤原民也教授と一祐会会長太田原功相談役からお祝辞を頂戴しました。

議長は、開催地の支部長という通例に従い、齋藤健仙台支部長、書記に小原四郎幹事と木村

彰男理事が選任され、ほぼ原案通り承認、可決されました。

科会役員名簿について、直前の理事会にはお元気な姿を見せていた元会長細川哲男相談役が急逝されたことに驚きの声が上がりました。

続いて科会副会長でもある千葉則茂教授による「電気系学科再編の背景とそのねらい」の講演は、電気系学科のおかれている現状を理解するための力となりました。

その後の懇親会は、すべて仙台支部にお任せで、東京組も盛岡組も十分に楽しみ、交流を深めることが出来ました。



平成21年度 岩手大学電気電子情報科会総会

平成21年6月27日 ハーネル仙台

年会費納入のお願い

年会費につきましては、皆様のご協力をいただいて第一回目をお願いを終了しました。一昨年から卒業後 10 年に達した方にお願いの文書等を発送しております。

しかし、平成 11 年以前卒の方で、納め忘れの方が大変多くいらっしゃいます。会の運営上、是非御協力の程お願い致します。

郵便局の振込用紙に卒業年・学科・住所・氏名・電話番号をご記入のうえ、
下記の口座に、よろしくお願いいたします。

振込先：岩手大学電気電子情報科会 口座番号：02260-9-64561 年会費：1 万円
(年会費は年 1000 円で 10 年分です)

平成 21 年度岩手大学電気電子情報科会総会議事録

日 時：平成 21 年 6 月 27 日 (土)

15:00 ~ 15:45

場 所：ハーネル仙台

議 長：齋藤 健 仙台支部長

書 記：小原 四郎 (仙台支部)、
木村 彰男 (本部事務局)

・第 1 号議案、第 2 号議案

事務局より、平成 20 年度事業 3 件の報告 (きたかみ 55 号発行、正会員歓迎会開催、第 6 回草刈賞選考) および平成 20 年度決算について、資料に基づき説明があり、続いて及川会計監査より監査報告が行われた。特に異議なく、承認された。

・第 3 号議案、第 4 号議案

事務局より、平成 21 年度の事業計画案 (きたかみ 56 号発行、正会員歓迎会の開催、草刈賞の選考と推進、会費検討委員会の設置)、および平成 21 年度予算案について、資料に基づいて説明が行われた。特に異議なく承認された。

・第 5 号議案

平成 21 年度科会役員名簿について、事務局より以下の内容について説明があった。

- 細川相談役が急逝されたため、名簿から削除

- 東京支部の幹事に寺井氏 (新任) を追加
上記の変更点について、特に異議無く承認された。

・第 6 号議案

事務局より、会則 (第 2 条) の改定案について、以下の説明があった。

- 現行の第 2 条には、これまでの学科正式名称がすべて羅列して記載されてあるが、工学部改組の度に会則を改定する必要があり、手続き的にも大変面倒である。

- そこで、会則の記述は「電気系工学科及び大学院工学研究科電気系工学専攻」という表現に留め、今後、学科および専攻の名称等については申し合わせ事項の中で修正変更していく形にしたい。

上記の案について、特に異議なく承認された。

・その他議案

太田原相談役 (草刈賞委員会委員長) より、草刈賞に関する現状の報告、副賞の新設、継続のための構想などについて、資料に基づき説明があった。

- 現状では、平成 30 年度あたりで原資が枯渇する懸念がある。

- 31 年度以降も継続するために、当面は経常費を充当しつつ、きたかみ紙上で寄付を募る等の広報活動を進めていきたい。

上記の点について、特に異議なく承認された。

以上



総会・講演会風景



学生歌斉唱



高校・大学先輩後輩

平成 21 年度電気電子情報科会役員名簿

(平成 22 年 1 月 1 日現在)

役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)	役 職 名	氏 名	卒業 (卒回)
会 長	柏 葉 安兵衛	S 38 (気 11)	東京支部		
副 会 長	南 幅 留 男	45 (子 1)	幹 事	柴 田 隆 昭	S 37 (気 10)
副 会 長	千 葉 則 茂	50 (気 23)	幹 事	飛 世 政 和	44 (気 17)
副 会 長	鳥谷部 達 雄	56 (情 3)	幹 事	山 田 均	47 (気 20)
理 事	小野寺 瑞 穂	29 (気 2)	幹 事	小 林 秀 雄	47 (子 3)
理 事	歳 弘 健	33 (気 6)	幹 事	在 家 宏	52 (子 8)
理 事	井 上 隆 志	40 (気 13)	幹 事	佐 川 徳 光	52 (子 8)
理 事	田 山 典 男	41 (気 14)	幹 事	山 内 利 明	55 (気 28)
理 事	立 花 龍 一	61 (情 8)	幹 事	菊 地 紀 幸	61 (子 17)
理 事・事 務 局	柳 橋 好 子	45 (子 1)	幹 事	狩 野 利 之	61 (子 17)
理 事・事 務 局	長 田 洋	62 (気 35)	幹 事	加 瀬 貞 二	H 4 (子 23)
理 事・事 務 局	木 村 彰 男	H 3 (情 13)	盛岡支部		
理 事・盛岡支部長	篠 福 寛	38 (気 11)	幹 事	宮 手 敏 雄	44 (気 17)
理 事・東京支部長	澤 藤 隆 一	47 (気 20)	幹 事	菊 池 政 四	47 (気 20)
理 事・仙台支部長	齋 藤 健	38 (気 11)	幹 事	岡 英 夫	48 (子院 4)
会 計 監 査	及 川 二千朗	38 (気 11)	幹 事	杉 村 洋 一	49 (子 5)
会 計 監 査	久保田 賢 二	42 (気 15)	幹 事	池 内 達	50 (子 6)
顧 問	佐 藤 淳	特	幹 事	佐 藤 信	57 (子 13)
顧 問	志 田 純 一	特	幹 事	佐 藤 文 昭	59 (子 15)
顧 問	佐々木 經 夫	特	幹 事	泉 澤 栄	60 (子 16)
相談役 (元会長)	阿 部 源 祐	16 (専 1)	幹 事	高 橋 康 浩	62 (気 35)
相談役 (元会長)	佐 藤 源 美	17 (専 2)	幹 事	佐々木 正 嗣	62 (子 18)
相談役 (元会長)	高 木 三 郎	17 (専 2)	仙台支部		
相談役 (元会長)	岡 田 整 八	18 (専 3)	幹 事	小 原 四 郎	37 (気 10)
相談役 (元会長)	阿 部 長 一	19 (専 4)	幹 事	板 澤 正 登	47 (子 3)
相談役 (元会長)	太田原 功	30 (気 3)	幹 事	田 代 良 二	55 (気 28)
相談役 (元会長)	佐々木 喜八郎	28 (気 1)	幹 事	佐 藤 雄一郎	H 3 (気 39)
			幹 事	柏 葉 安 宏	H 9 (電電 2)

平成 21 年度電気電子・情報システム工学科の構成員名簿

平成 22 年 1 月 1 日現在

電気電子工学コース (コース長 藤原民也 教授)			情報システム工学コース (コース長 安倍正人 教授)		
分野	職 名	氏 名	分野	職 名	氏 名
電子デバイス工学	教授	馬 場 守*	コンピュータ・ネットワーク工学	教授	安 倍 正 人
	教授	谷 口 宏		教授	西 谷 泰 昭
	教授	岡 英 夫		教授	鈴 木 正 幸
	准教授	西 館 数 芽*		准教授	永 田 仁 史
	准教授	小林 宏一郎		講師	平 山 貴 司
	助教	向 川 政 治		助教	藤 岡 豊 太
	助教	叶 榮 彬*		助教	佐 藤 信
	助教	田野崎 真 司			
		*フロンティア材料 機能工学専攻所属			
電子システム工学	教授	恒 川 佳 隆	知能情報処理システム工学	教授	渡 邊 孝 志
	教授	長 田 洋		教授	西 山 讓 清
	教授	大 坊 真 洋		教授	三 輪 久 男
	准教授	大本 間 尚 樹		講師	吉 木 彰 忻
	助教	佐 藤 宏 明			
電気エネルギー工学	教授	藤 原 民 也	メディアシステム工学	教授	厚 井 裕 司
	教授	山 田 弘 一		教授	千 葉 則 茂
	教授	高 木 浩 一		教授	今 野 晃 市
	准教授	高 成 晋 也		教授	藤 本 忠 博
	助教	高 橋 和 貴		助教	明 石 卓 也
				助教	中 谷 直 司
				助教	原 美 オサマ
				事務補佐員	懸 田 ひかる

技 術 部					
工学系技術室	職 名	氏 名	情報技術室	職 名	氏 名
	技術専門員	千 葉 茂 樹		副技術室長	阿 部 英 志
	技術専門職員	太 田 康 治		技術専門員	那須川 徳 博
	技術専門職員	萩 原 由香里		技術専門職員	栗 田 宏 明
	技術専門職員	庄 司 こずえ		技術職員	田 頭 徹 平
	技術専門職員	志 田 寛		技術職員	村 上 浩 士
	技術専門職員	千 葉 寿		技術職員	金 野 哲

平成 21 年 年表

電 気 系 学 科 年 表	
1/17-18	大学入試センター試験
1/21	科会理事会打ち合わせ 大学工学部 会長・事務局3人
1/24	科会平成20年度第3回理事会・盛岡支部新年会 いわて国保会館 出席17人 20年度事業計画についてほか
2/3-4	平成20年度博士前期課程第2次入学者選抜試験 電気電子工学専攻6名合格, 情報システム工学専攻8名合格
2/4	入学願書受付締切 電気電子・情報システム工学科：前期2.2倍, 後期9.6倍
2/5	平成20年度博士後期課程第2次入学者選抜試験 電子情報工学専攻2名合格
2/12	第6回草刈賞選考委員会 岩手大学工学部会議室 《選考委員》 電気電子工学科：岡英夫学科長、山田弘学生委員 情報システム工学科：千葉則茂学科長、鈴木正幸教務委員 電気電子情報科会：柏葉安兵衛会長、太田原功相談役
2/18	情報システム工学専攻修士論文審査発表会
2/19	情報システム工学科卒業論文発表会
2/13	久保田賢二先生最終講義「岩手大学での45年間と放送アンテナについて」
2/17-18	電気電子工学専攻修士論文審査会
2/20	電子情報工学専攻博士論文審査会（情報システム工学講座分）
2/24	「きたかみ」編集委員会 会長・事務局3人
2/25	平成21年度個別学力検査前期日程 電気電子・情報システム工学科88名合格
2/27	田山典男先生最終講義「モデル再構成に基づく産業用CTスキャン」
3/1	「きたかみ」55号発行 5300部
3/2	電気電子工学科卒業研究発表会
3/3	道上修先生最終講義「高性能機能性薄膜を実現するエピタキシャルスパッタ技術の確立を目指して」
3/10	科会新正会員歓迎会 岩手大学工学部食堂 参加者72人 第6回草刈賞受賞者紹介 電気電子工学科：井関肇 情報システム工学科：本木友理・吉田亮太
3/12	平成21年度個別学力検査後期日程 電気電子・情報システム工学科16名合格
3/23	岩手大学卒業式（岩手県民会館） 工学部第57回卒業生：電気電子工学科87名, 情報システム工学科72名 大学院博士前期課程第40回修了生：電気電子工学専攻37名, 情報システム工学専攻30名 大学院博士後期課程第11回修了生：電子情報工学専攻11名
3/31	電気電子工学科 田山典男教授 定年退職 電気電子工学科 道上 修教授 定年退職 電気電子工学科 久保田賢二講師 定年退職
4/1	本間尚樹氏を電気電子・情報システム工学科准教授（電気電子工学コース）に採用 明石卓也氏を電気電子・情報システム工学科准教授（情報システム工学コース）に採用
4/7	岩手大学入学式（岩手県民会館） 工学部入学生：電気電子・情報システム工学科131名 3年次編入学生：電気電子工学科7名, 情報システム工学科3名 大学院博士前期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻49名 大学院博士後期課程入学生：電気電子・情報システム工学専攻3名
5/11-27	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成21年9月修了予定者》および中間発表会《平成22年3月修了予定者》

5/13	第2回草刈賞委員会 太田原功相談役、柏葉安兵衛会長、長田洋理事、木村彰男理事
6/1	開学記念日
6/2	電気電子工学科スポーツ大会
6/4	平成22年度推薦編入学試験 電気電子工学科1名合格
6/5	科会平成20年度会計監査 岩手大学工学部会議室
6/11-12	電気学会電子回路研究会
6/13	岩手大学創立60周年記念事業、ホームカミングデー 記念講演「現代科学と市民」 講師 益川敏英氏（2008年ノーベル物理学賞受賞者） http://www.iwate-u.ac.jp/60univ/
6/13	科会平成21年度第1回理事会 岩手大学一祐会館大会議室 出席者13人 総会議案書の審議ほか
6/27	科会仙台支部総会 仙台市ハーネル仙台 38人
6/27	平成21年度岩手大学電気電子情報科会総会 仙台市ハーネル仙台 46人 平成20年度事業報告・決算報告、21年度事業計画・予算、会則の改訂、草刈賞委員会からの提案等 講演「電気系学科再編の背景とそのねらい」 千葉則茂副会長
7/3	平成21年度盛岡広域地域産業活性化人材養成等事業「インテリジェントシステム先端技術セミナー」《盛岡広域地域産業活性化協議会、財団法人いわて産業振興センター、岩手大学、いわてインテリジェントシステム研究会共催》 招待講演①「ヒューマンセントリックデータマイニングに基づく家電・PC向けのインテリジェントな設計支援技術」折原良平氏（東芝研究開発センターヒューマンセントリックラボラトリー室長、東京工業大学大学院総合理工学研究科連携准教授） 招待講演②「複眼撮像システムTOMBOとそのアンビエント環境センサへの応用」谷田 純氏（大阪大学大学院情報科学研究科教授）
7/7-8	平成22年度一般編入学者選抜試験 電気電子工学科7名合格、情報システム工学科3名合格
7/10	平成22年度大学院博士前期課程推薦入学者選抜試験 情報システム工学専攻7名合格
8/6	オープンキャンパス
8/7	情報システム工学コース スポーツ大会
8/31-9/1	平成22年度大学院博士前期課程入学者選抜試験《平成22年4月入学》電気電子・情報システム工学専攻36名合格
9/7-8	計測自動制御学会東北支部45周年学術講演会 招待講演①「センシング技術開発への氷海域研究からの要望」堺 茂樹氏（岩手大学工学部長、岩手大学教授） 招待講演②「発熱する植物に学ぶ温度制御システム」伊藤菊一氏（岩手大学農学部附属寒冷バイオシステム研究センター教授） 招待講演③「マルチエージェント動的システムの合意形成：一般化周波数変数を持つ動的システム表現に基づく性能解析と応用」原 辰次氏（計測自動制御学会会長、東京大学大学院教授）
9/8	学術講演会《計測自動制御学会、システム理工学系共催》 「最適制御法のコンピュータ将棋への応用－ボナンザ！その最適戦略とは？－」保木邦仁氏（東北大学大学院理学研究科助教）
9/16	文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（岩手県立水沢高等学校1年生約140名受け入れ）
9/16-18	電気電子工学科工場見学《関東地区》 NTTドコモ R&Dセンタ、東芝 浜川崎工場、富士通 川崎工場、フジクラ 佐倉事業所、NTTドコモ ネットワークテクニカルオペレーションセンター 引率：向川・佐藤教員（参加者51名）
9/28	電気電子工学科工場見学《東北地区》（新興製作所、TDK-MCC北上工場） 引

9/28-30	率：大坊教員（参加者17名）
9/30	電気電子工学専攻修士論文中間審査 平成21年度岩手大学修了式・卒業式（岩手大学農学部付属農業教育資料館） 工学部卒業生：電気電子工学科1名，大学院博士前期課程修了生：情報システム工学専攻3名，大学院博士後期課程修了生：電子情報工学専攻1名
10/1	岩手大学入学式（岩手大学事務局） 大学院博士前期課程電気電子・情報システム工学専攻4名入学 大学院博士後期課程電気電子・情報システム工学専攻4名入学
10/2	岩手大学工学部特別講演会「ソフトパスエンジニアリングの構築と実践に向けて」 特別講演①「持続可能な社会の構築に向けての大学への期待」磯田文雄氏（文部科学省研究振興局長） 特別講演②「微細化の限界に挑戦する半導体製造装置と産学連携への期待」保坂重敏氏（東京エレクトロン株式会社執行役員） 特別講演③「芸術科学は未来を切り拓く」西原清一氏（芸術科学会会長，筑波大学名誉教授）
10/15	科会三役会 岩手大学工学部 会長・副会長・事務局3人
10/17	科会第2回理事会 いわて国保会館 12人 各支部報告、会費検討委員会設置等
10/22-23	電子情報通信学会環境電磁工学研究会，マイクロ波研究会，電気学会マグネティックス研究会合同研究会 特別講演①「生体磁気計測とEMI－冷凍機駆動雑音と環境磁気雑音の低減を中心にして－」笹田一郎氏（九州大学大学院総合理工学研究院教授） 特別講演②「EMC/ESDをあれこれ考える－温故から知新へ－」藤原 修氏（名古屋工業大学大学院工学研究科教授） 特別講演③「左手系メタマテリアルとマイクロ波応用」真田篤志氏（山口大学大学院理工学研究科准教授）
10/24	オープンキャンパス（大学祭）
10/30	電気電子工学科社長実践学特別講義，「これからの企業が求める技術者像－経営者が期待するもの－」梅 良之氏（S42年電気卒，TTK取締役会長）
11/5	「きたかみ」編集委員会 会長・事務局3人
11/6	システム理工学系講演会，「ブレイクスルーのイノベーション理論－半導体ベンチャーを立ち上げて－」山口栄一氏（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）
11/13	システム理工学系講演会，「無線LANの要素技術と標準化動向」平栗健史氏（日本電信電話NTTアクセスサービスシステム研究所）
11/20	電気電子工学科社長実践学特別講義，「IT時代の製造業としての我社」齊藤新一氏（S49年電気卒，大井電気代表取締役社長）
11/25	平成22年度推薦入学試験 電気電子・情報システム工学科25名合格
11/27	システム理工学系講演会，「人支援ロボットの開発」高橋隆行氏（福島大学共生システム理工学類教授）
11/12-30	情報システム工学専攻修士論文予備審査会《平成22年3月修了予定者》および中間発表会《平成22年9月修了予定者》
12/4	電気電子工学科社長実践学特別講義，「競争には勝たねば－今年の採用事情－」池田隆夫氏（S35年電気卒，富士通エフ・アイ・ピー前代表取締役社長）
12/11	電気電子工学科社長実践学特別講義，「電気電子情報技術は，これから黄金期へ」澤藤隆一氏（S47年電気卒，三基計装代表取締役社長）
12/18	システム理工学系講演会，「岩手・宮城内陸地震にみられる地磁気信号の変動」竹内伸直氏（秋田県立大学システム科学技術学部教授）
12/18	大学院博士後期課程学位論文予備審査会（情報システム工学講座）
12/25	平成21年度第3回情報処理学会東北支部研究会

岩手大学電気電子情報科会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は岩手大学電気電子情報科会と称する。
- 第2条 本会は盛岡高等工業学校電気科、盛岡工業専門学校電気科、並びに岩手大学工学部電気系工学科及び大学院工学研究科電気系工学専攻の傘下に集った者の親睦を図り、緊密な連絡をとり、電気工学、電子工学、情報工学に関する知識を交換する。
- 第3条 本会の本部事務所は盛岡市上田 岩手大学工学部電気系工学科に置く。
本会に支部を置くことができる。支部の設置は総会の承認をうけるものとする。
- 第4条 本会は第2条に定めた目的を達成するために会誌の発行、講演会等を行う。

第2章 会 員

- 第5条 会員を分けて特別会員、正会員、準会員とする。
- 第6条 特別会員は岩手大学工学部電気系工学科の現・旧教職員とする。
- 第7条 正会員は盛岡高等工業学校卒業生、盛岡工業専門学校卒業生、岩手大学工学部電気系工学科卒業生、岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻修了生、並びに役員会の承認を経た者とする。
- 第8条 準会員は岩手大学工学部電気系工学科の在校生並びに岩手大学大学院工学研究科電気系工学専攻学生のうち正会員でない者とする。

第3章 会 計

- 第9条 本会の会計は一般会計及び基金特別会計とする。基金は将来のために積み立てるものとする。但し、その利息は一般会計に繰り入れることができる。
- 第10条 会費は準会員入会時に入会費として10,000円を納入する。また、卒業後10年を経過した正会員は年会費として10年毎に10,000円を納入する。尚、納入した会費は理由の如何を問わず返却しない。
- 第11条 本会の収支は毎年4月末日に於いて決算を行い、会計監査をへて総会に於て承認をうけ併せてこれを報告する。

第4章 会 議

- 第12条 会議は総会、臨時総会、役員会及び理事会とする。
理事会は、会長、副会長、理事及び相談役をもって構成する。
- 第13条 総会は毎年1回会長が之を招集して出席人員を以て成立する。
- 第14条 臨時総会は役員会に於いて必要と認めた時、会長が之を招集する。
- 第15条 役員会及び理事会は必要に応じて会長が招集する。

第5章 役 員

- 第16条 本会に次の役員を置く。
- | | | |
|------|-------|-----------------------------------|
| 会 長 | 1 名 | 正会員より選出する。 |
| 副会長 | 3 名以内 | 正会員より選出する。 |
| 理 事 | | 正会員より互選する。
尚、各支部長は理事を兼ねるものとする。 |
| 会計監査 | 2 名 | 正会員より選出する。 |
| 幹 事 | | 正会員の中から理事会で推薦し会長が委嘱する。 |
| 顧 問 | 若干名 | 特別会員より会長が之を委嘱する。 |
| 相談役 | | 元会長は終身相談役として委嘱するものとする。 |
- 第17条 各役員の任期は1ケ年とし、再選出来る。改選は毎年総会に於いて行なう。
但し任期中欠員が出来た場合は役員会に於いて選出し補充する。
- 第18条 会長は本会を代表し其の事務を総括する。
副会長は会長を補佐する。
理事は本会の庶務を掌理する。
会計監査は会計を監査する。
事務局担当理事は本会の会計を掌理し、且つ金品物件の保管の責に任ずる。
幹事は会員相互の親睦と連絡の任に積極的にあたる。
- 第19条 支部に支部長を置き、本部に準じて役員をおくことができる。

第6章 会誌、講演会及び座談会

- 第20条 本会は会誌「きたかみ」を発行して会員に配布する。
- 第21条 講演会及び座談会は随時行なう。
- 第22条 支部の内規は各支部に於いて定め、会長の認可を受けることにする。
- 第23条 会則の変更は総会に於いて過半数の賛成が無ければ変更する事が出来ない。

付 則

本会則の第10条の改定は、平成16年5月1日から施行する。

(昭和17年1月1日制定)
(昭和25年度総会一部改正)
(昭和37年度総会一部改正)
(昭和40年度総会一部改正)
(昭和41年度総会一部改正)
(昭和46年度総会一部改正)
(昭和50年度総会一部改正)
(昭和51年度総会一部改正)
(昭和56年度総会一部改正)
(平成4年度総会一部改正)
(平成11年度総会一部改正)
(平成12年度総会一部改正)
(平成15年度総会一部改正)
(平成20年度総会一部改正)
(平成21年度総会一部改定)

「きたかみ」56号トピックス

桜の木を母校に寄贈

株式会社 TTK（本社仙台市）会長梅良之氏（昭和 42 年電気卒）が、母校岩手大学創立 60 周年を記念して平成 21 年 5 月に桜の苗木 20 本を寄贈し、植樹が行われました。苗木とは言え今年から花が咲きそうな大きな木で、キャンパスの環境整備に力を入れている大学では大変感謝しております。

このほか、梅氏は平成 17 年にも岩手大学工学部に桜の木を寄贈しております。また、高松の池の周りや県立博物館前などにも沢山寄贈しています。

本の出版

昭和 38 年電気卒の最上清治郎氏が、

「その人造り=育児+教育+食育はまちがっています！

ちゃんとしたフツウの国にするために徹底追求」

という題名の本を文芸社（東京都新宿区 1-10-1）から出版されました。これまでの自分の体験や収集した情報をもとにまとめた力作で、内容に共感を覚える方も多いかと思います。

一般書店の外、ネットでも販売されているそうです。

編 集 後 記

バンクーバーでの冬季オリンピックが始まりました。

日本選手の活躍を期待しながら、編集作業を進めております。

昨年は、高校野球でも、岩手県の花巻東高校の菊池雄星投手が話題になりました。

プロでも一番の期待の星で、性格の良さも評判です。

盛岡商業高校のサッカー全国制覇に続き、北国の高校生の活躍に、「白河以北一山百文」と言われて俳号を「一山」とした、わが平民宰相原敬も溜飲をさげているのではないのでしょうか。

「きたかみ 56 号」をお届けします。

今号は、急逝された細川哲男元会長と小澤甚一郎元会長そして百足先生を偲ぶ記事を掲載しました。小澤元会長のは原稿依頼が間に合わず、弔辞のみとなりました。追悼の記事は次号に掲載いたします。

また、昨年 3 月には 3 人の先生方が退職され、在職中の思い出などをご寄稿いただきました。

前号から始まった支部担当の 4 ページは、今号は仙台支部が受け持っていました。楽しんでいただけましたでしょうか。

総会は、例年通り「チャグチャグ馬コ」の当日です。

ぜひ、お出かけください。盛岡もだいぶ変わりました。

編集委員 柏葉 安兵衛（会 長：昭和38年電気卒）
長田 洋 （事務局：昭和62年電気卒）
木村 彰男 （事務局：平成 3 年情報卒）
柳橋 好子 （事務局：昭和45年電子卒）

き た か み 第 56 号

発行日 平成 22 年 3 月 1 日
発行者 盛岡市上田 4 丁目 3 番 5 号
岩手大学工学部内
岩手大学電気電子情報科会
☎ 019-621-6381
印刷所 ㈱阿部謄写堂
盛岡市本町通 2 丁目 8 番 37 号
☎ 019-623-2361

平成 22 年度総会並びに懇親会開催のご案内

平成 22 年度の電気電子情報科会総会は、下記のように開催することになりましたので御案内申し上げます。なお、盛岡支部総会も併せて行います。会員各位の多数のご参加をお待ちしております。

なお、住所や勤務先等の確認にも使用させていただきますので、綴り込みのハガキで総会への出欠を、1 ヶ月前の平成 22 年 5 月 12 日までにご連絡を頂きたいようお願い申し上げます。

記

日	時	平成 22 年 6 月 12 日（土）	チャグチャグ馬コ開催日
		盛岡支部総会	午後 2 時 30 分～ 3 時 00 分
		総 会	午後 3 時 00 分～ 4 時 00 分
		講 演 会 等	午後 4 時 00 分～ 5 時 00 分
		懇 親 会	午後 5 時 00 分～ 7 時 00 分

場 所 いわて国保会館
盛岡市大沢川原三丁目 7-30
TEL 019-623-4321

議 題 1. 平成 21 年度事業報告、決算報告承認
2. 平成 22 年度事業計画案、予算案審議
3. その他

講 演 会 演題「東京からみた岩手（仮）」
講師：澤 藤 隆 一 氏（昭和 47 年電気卒）
在京盛岡広域産業人会代表、三基計装(株)社長、科会東京支部長

懇親会会費 5,000 円（懇親会席上で、昨年秋・今年春に叙勲された方を御紹介し、祝意を表します。
叙勲された方を御存知の方はお知らせ下さい。）

連 絡 先 総会出欠・叙勲された方の紹介等、会誌「きたかみ」に綴り込みのハガキを使用するか、
下記事務局宛電話、FAX 又は E-mail 等でご連絡下さい。

岩手大学電気電子情報科会事務局（岩手大学工学部電気電子・情報システム工学科内）

長 田 洋 TEL・FAX 019-621-6381

E-mail osada@iwate-u.ac.jp

木 村 彰 男 TEL・FAX 019-621-6488

E-mail kimura@cis.iwate-u.ac.jp

柳 橋 好 子 TEL・FAX 019-686-2253

E-mail t.k-yngbs@nifty.com